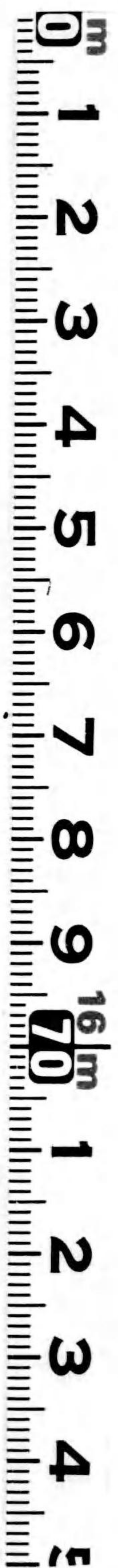


當世  
氣質  
女百面相

山村愛花著

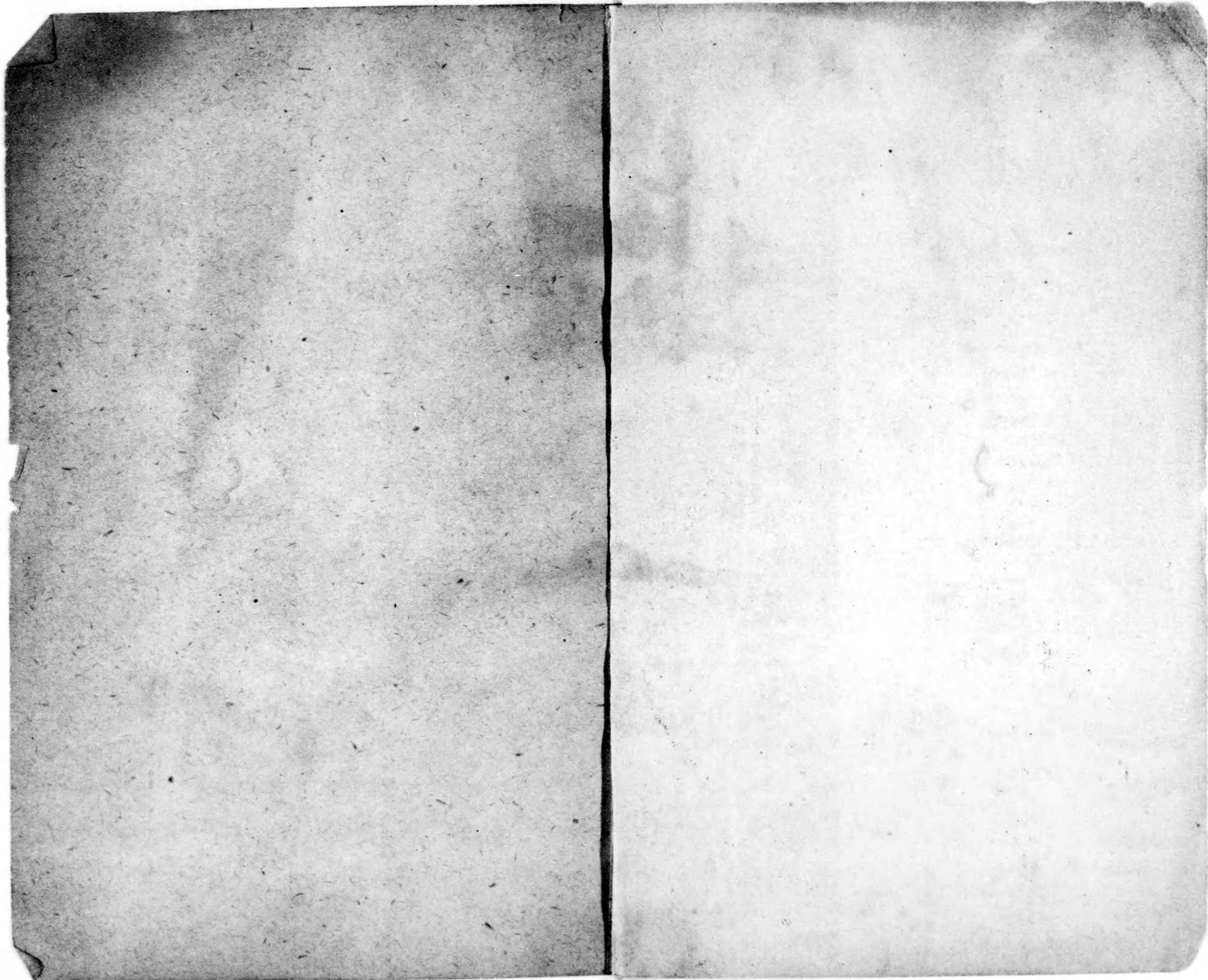
特100

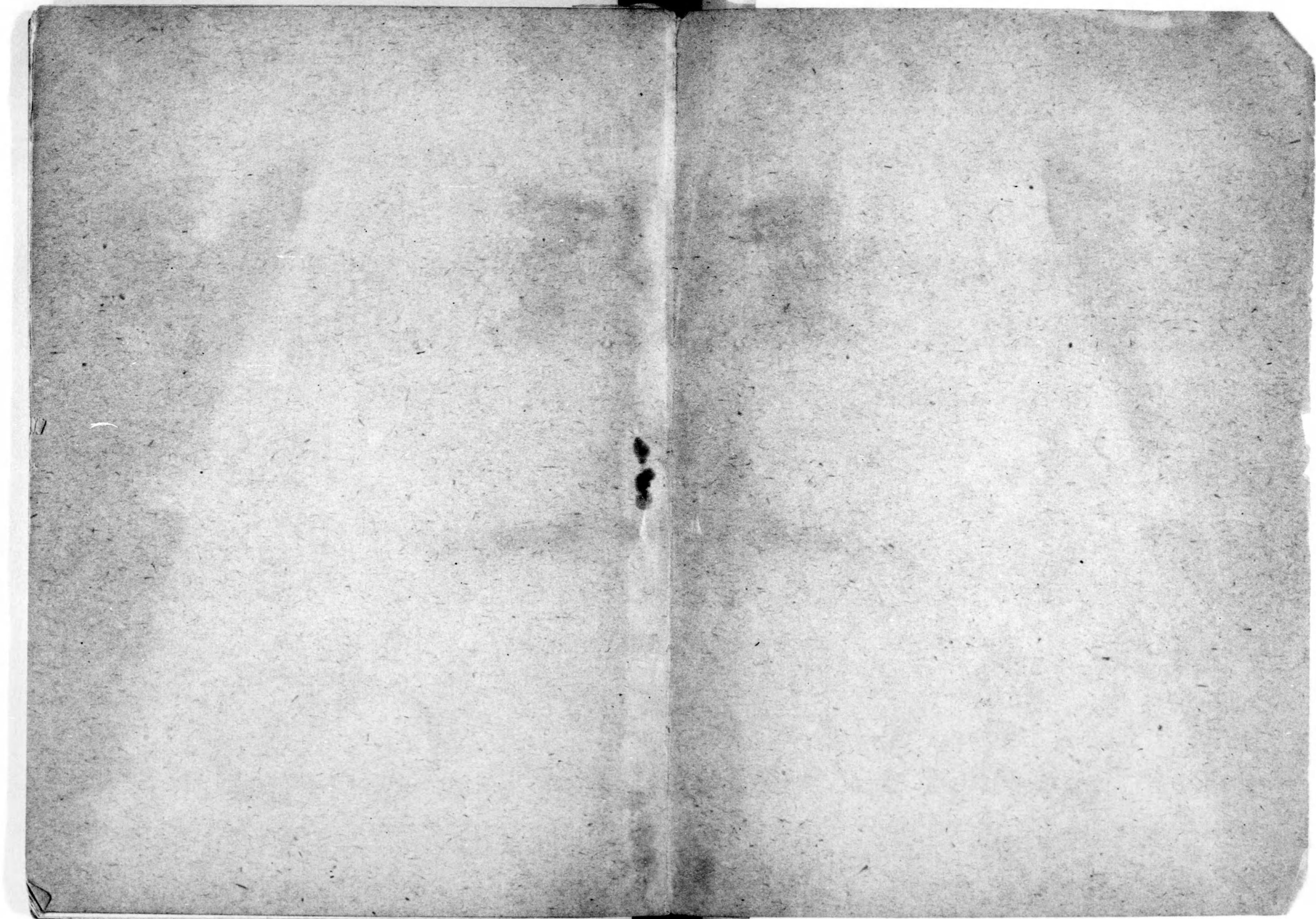
36



始







特10

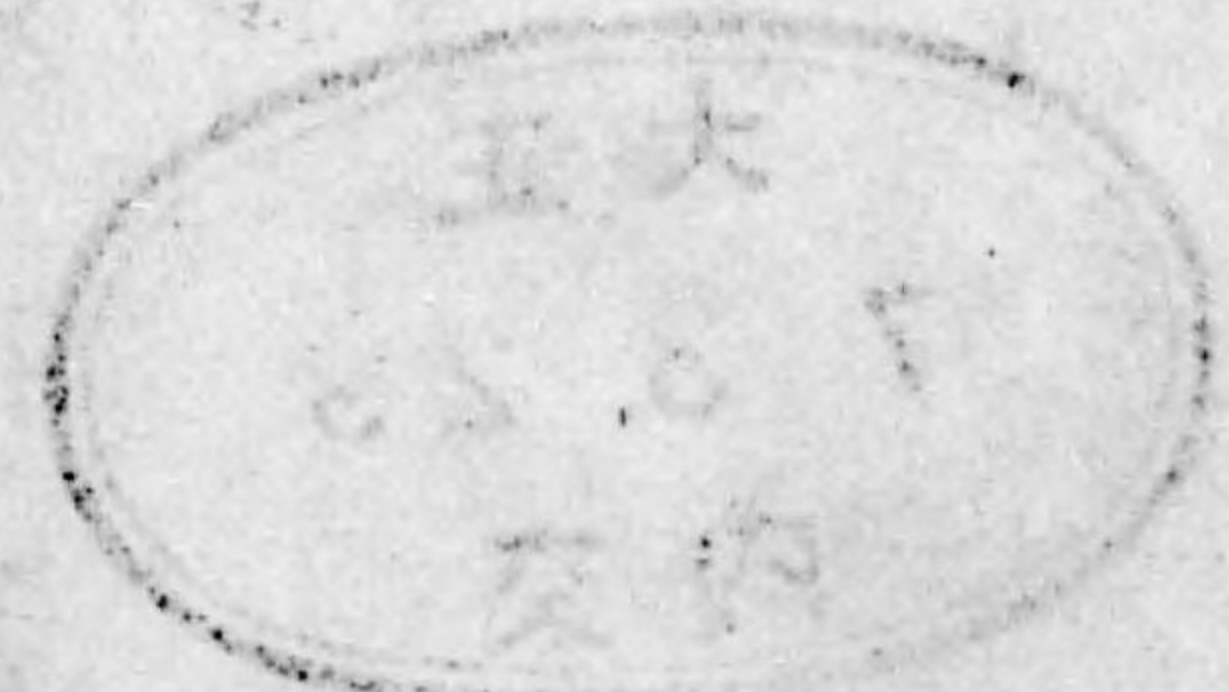
36



面  
相

山  
村  
愛  
花  
著

大正  
7. 3. 29  
内交







はしがき

日本の本は岩戸神樂の始めより女ならでは夜の明けぬ國、女なる哉、女なる哉、善きも悪きもおしなべて女の活動こそ目覺しかるける次第なり。

國を亡ぼすも女。家を失ふも女。身を害ふも女。産を破るも女。さても恐ろしの女哉。されどされど、美しきも女。優しきも女。親切なも女。愛くるしきも女なり。我元來女は大好なり。いつも其美點のみを擧げて其缺點をみず、爲めに傷事に遇ふ數回。今やあらゆる階級にある現代婦人の心裡を測斷して迷ふものゝ爲めに本書成る亦故なきに非ず。

著者識

當世氣質女百面相

目次

▽上流婦人の魂膽	一
▽都會の令嬢	二
▽政治家の細君	二
▽新しき女	三
▽山の手の奥さん	四
▽下町の女	五
▽電話の交換手	六

目次



▽舊思想の姑さん	七三
▽新思想のお嫁さん	八四
▽女優といふもの	九四
▽成り上りの細君	一〇四
▽継母のわけ隔て	一一四
▽素ッ堅氣の娘さん	一二四
▽眞面目な妾	一三四
▽三十前後の寡婦	一四四
▽遊人の女房	一五二
▽美人がゐる女	一六二

▽寄宿舎の女學生	一七二
▽博愛なる看護婦	一八二
▽女事務員	一九二
▽夢に憧憬る、田舎娘	二〇一
▽貧民窟の女房	二一一
▽お茶屋の女中	二二二
▽女の髪結さん	二三二
▽お鬘どん根性	二四二
▽家庭教師としての女	二五〇
▽若い産婆さん	二五九

▽女 <small>をんな</small> 師 <small>し</small> 匠 <small>しやう</small> 氣 <small>かた</small> 質 <small>質</small> .....	二六七
▽雇 <small>や</small> 仲 <small>と</small> 居 <small>や</small> の活 <small>くわつ</small> 動 <small>どう</small> .....	二七五
▽氣 <small>き</small> 脱 <small>はげ</small> のした藝 <small>げい</small> 者 <small>者</small> .....	二八三
▽面 <small>おも</small> 影 <small>かげ</small> を保 <small>たも</small> つ花 <small>はな</small> 魁 <small>魁</small> .....	二九一
▽魔 <small>ま</small> 窟 <small>くつ</small> に巢 <small>す</small> をくふ女 <small>をんな</small> .....	三〇〇
▽活 <small>くわつ</small> 動 <small>どう</small> 寫 <small>しゃ</small> 真 <small>しん</small> の女 <small>をんな</small> 案 <small>あん</small> 内 <small>ない</small> .....	三二〇
▽カ フ エ ー の 女 <small>をんな</small> .....	三二八

目次終

當世氣質 女百面相

山村愛花著

上流婦人の魂膽

新華族様と云へば大底成上りの人が多いのである。世間から殿様と呼れ御前と立てられるに對して其妻君が、奥様ともてはやされ、令夫人と敬稱されてお高くとまる女、また社會の上流に位置を占めて交際場裏に游泳する女性で、若い方には随分と高等の教育も受け天晴修養の出來てゐる豪い人もあるであらうが、大頭連の黴臭くな

上流婦人の魂膽

つてゐる人々の奥様には、甚だ感心しない我々の山の神とちつとも  
撰ばない、てんで修養も無ければおまけに素行も修まらない阿婆摺  
も随分多くあるのである。朝に吳人を送りて夕に越郎を迎へ、昔の  
辻君の様な如何はしいのがある。一々數へ擧げないでも既に世間に  
も知られ、最近では某大官が赤坂藝妓を夫人の御位に据ゑ、畏れ多  
くも式典の場へノンコの酒蛙で列席させたとかで、大分ある向で物  
情騒然たるものもあるではないか。つまり成上りの夫人奥様と云ば  
只だ亭主の權威を笠に被て、自らも大層豪いものゝやうな面構へを  
する、が、悲しいことには相應な夫れだけの資格が乏しいのである  
いくら豪がつてもいくら笠に被ても、品性といふ奴はどうしたつて

自然に備はるもので、なか／＼附焼刃では勿體の附くものではない  
から、夫れを瞞着するには俗言の馬士にも衣裳を唯一の手段と、矢  
鱈無性に貴金屬や寶石類で、碌でもない殘骸を飾り立て、好年齢を  
しながらお轉婆のありたけを盡くし、現代婦人の標本とお高く止る  
は何と嘆かほしい次第ではないか。  
堂々たる上流夫人の群で殆ど虚榮の夢に咒れないものはてんで無  
であらう。然し如何に亭主を尻の下に敷いて鼻毛を讀んでも、或ひ  
は上流男子の狒々の素行の交換として、機密費の手繰出しに汲々す  
るとしても、流石に何もかもサラケ出して御用金を掴み取ることは  
出来ない。然りとて甲某夫人は立派な洋装が出来た、今度の夜會に

は新装して交際場裏の花と誇るさうだとか、乙某夫人は金剛石の腕環を求めて得意がつて居るさうだなどと聞くと、とても辛抱出来るものではない、嫉妬や偏執の心に驅られて彼れを羨んだり此れを妬んだり、揚句の果に態々自動車を呼び寄せて出懸る先きは先づ三越である。此處はまたこんなお客様が最も多きを占める大事の得意様である、こんな飛揚りの虚榮の權化とも云ひさうな、只だ貴金屬や高貴な物さへ身に纏ふたなら、お腹の中が空腹でも一向に無頓着で反つてお供につれる女中の方が人品も姿も、遙に一頭地を抜くにもお氣が注かれず、奥様と云れて反身に爲つてる下司の本性を現し、さア之れもお買ひなされ、之れもお召しなさいと巧みに誘られてあ

ちこち彷徨すると、類は友なる同じ虚榮の塊りが續々とやつて來るてんで競争的に見得坊にする買物であるから、溜つたものではないさもない手合は主人の不在を見込んで、鬼の居ない間にと云ふやうな内所事に電話で、注文品の持込みを命じ女中どもを參謀にあらゆる魂膽を練り、之れなら先づ安心と思ふと、急に圖々しくポク／＼もので、まるで口を拭いて知らぬ顔。

『お清や、御前に申し上げては成りませんよ』と口止めはするが口止め料として半襟一かけの餘祿に在りつくことは滅多にはない、元來成上りの家ほど、又成上りの女ほど、酸ばくて人使ひの荒ッぽいものはない。つまり胡麻摺の上手な奴が最後の勝利を得るまで、他

はてんで骨灰である。

好い面の皮は主人である、デレリ茫然と鼻の下を思ひの外に伸し  
てお嬢に親以上の孝行を盡し、おまけに月末に多分の機密費を搾り  
あげられてゐる。いつも虚榮の尻拭ひをさせられて何もかも御存知  
ないも後生樂であるが、畢竟するに寶悖つて入るものは又横道へ反  
れるが常で所謂鮎ごっこである。それも二百とか三百とかの額なら  
何とか臨機應變の口實もつくし、否や無理やりにも其處のところは  
甘く瞞着しもするが、如何に話め切つた宿碌でも最う五百六百の纏  
まつた金嵩になつてくると、左様は中々問屋で卸すものではない、  
偶には使ひ拂ひの追窮もされるもので、いくら奥様だと威張つて居

ても、つまりは主人の權威で世の中に面をツン出してゐるのである  
虎の背中に騎つた狐であるのである。一朝お拂ひ函となつて三行半  
をお土産に、元の古巢へ逆戻りをしたらと云ふ懸念は、自惚の充ち  
きつた心にも幾分か浮んで来る、一片の良心は瞿粟粒ほどでも胸底  
に兆して来る。商人はいくら大切のお得意様でもお拂ひの下らぬを  
いつまでもノンベンクラリで氣を好くしてゐたら乍ち帳尻の缺陷が  
生じるので、一月二月こそ氣も好くするが、夫れからは段々と督促  
が猛烈になつて来るものである。其の中には昨日の流行は今日の陳  
腐となつて、三四回も公會でこれ見してくれと誇つた物も、最うそ  
なつてくると流行後れと成つて何となく肩身が狭い、さア斯うなる

と居ても起ても堪らない、前の借銭を支拂ねば新調の工夫は付かず  
そうかといつて無暗な豫算超過を持ち出して魂膽の底が割れたら最  
後、家よりも主人よりも大切の自己の名聞を棒に振り、奈落の  
底へ逆筋斗うつて落るが厭さに、煩悶懊惱しつゝ、目先きの遺繰算段  
に面窶れの見えるは、身から出た錆とでも云ふか、僭上の報いは靦  
面で早やめぐりくる車の下り坂、機會がついては中々容易に止めや  
うの無いものである。

さあいよいよ窮すると達すとやらで、斯うなつてくると何とか智  
慧は出るもの、常に胡麻摺と苞苴内謁でお覺え目出度當世才子が手  
品の後見と云ふ格で、素より利益交換を初頂天からの飼食にして、

奥様から内密お頼みの御用と使者が立つ、何は然れこのお頼み無事  
に仕遂れば決して悪い風は吹かぬと、慾といふ奴が先立ちで急いで  
飛んで来る。

「おゝ、奥久田さんですか、是非く貴下に御盡力を願ひ度ことが  
ありましてね』はい、左様でございますか、何んの御用か私の様  
なもので御用に立つことなら、日頃の御恩返し、たとひ火の中でも  
水の中でもいつ何時でも飛び込みます』相變らず氣軽な人ねえ、  
實は少し都合があつてお金を借りたいのですが、何處かお心當りは  
ありますまいかね』へゝゝ奥様、御串戯を……』いゝえ、串戯どこ  
ろぢやありません、まあ眞個のことですよ』奥様……貴婦方なんぞ

が金をお借りなさるなんてえのは……怪しいぢやありませんか、嘘  
 でしよう『いゝえ……、實はね夫れが良人に打明けられるのなら、  
 五百や七百のことでお願ひはしませんか、交際費が餘り嵩み過ぎた  
 ので、つひ氣の毒でねえ、左様／＼は言悪いのですわ、夫れに貴下  
 も知つていらッしやる執事が彼の通りの頑固一點張で、機密の費用  
 にまで立入つて忠義振てねえ』成程な、三太夫君の言ひさうなこと  
 で……全體頑冥不靈な男ですからなア、奥様に對してそれ位なこと  
 は申しかねますまいと思はれます……はアさうなんですか、そり  
 や随分御周旋もいたしませう、なに奥様が御調印なされ、ば五百や  
 千なら譯はありません』それでは氣の毒ですがね、一骨折つて見て

下さい、妾も屹度口添へを致し今年の年度變りには御昇級になるや  
 うお周旋しますから』何うも恐れ入りますな、いや此の事は私が  
 お引受け申しましたから御安心あそばせ……』と云ふやうな調子で  
 與久田君東奔西走でんで、役所も休んで一生懸命盡力する。兎に  
 角對手は社會の一方面に時めく人の令夫人である立派な奥様である  
 いざ鎌倉といふ場合には公にすればちつとも損のない、余貸ども  
 の望む椋鳥であるから、與久田の運動は見事圖星に當つて、マンマ  
 と首尾よく成功して、令夫人は茲に借金が成立ち、ホツト息を吐い  
 て、やつとの事で舊債を返し、愆しいく流行品の一揃ひを新たに  
 需めることが出来るのである。

一二  
嗚呼上流社會の婦人、何不自由なき贅澤三昧に綺羅を飾つて、貧乏人から羨望される奥様にして尙ほこの事あり、世の中の總てに表裏は免れ難いものであらう。上流夫人で何の某と世間から視線を注がれて居る者で、五百圓や千圓の内所の借金をしてゐない人は殆んど無い位である。之れが見得坊の塊り虚榮の權化たる當世奥様氣質を、尤も卒直に語つて居る浮世の寫眞であるのである。咄、知らぬは宿碌ばかりなりさ。

### 都會の令嬢

令嬢といふと、何となくハイカラさんのやうに聞えて、社會に相

當の地位を占めた父兄の娘さんや妹さんと思はれるし、お姫様といへば上流の家庭で、華族さんのお嬢御であるかのやうに感ぜられ、お嬢さんまた嬢さんといへば、中流以下に屬するやうな考へが起り娘さん嬢御となつてくると堅氣でオツ通す野暮でなくば、第三流四流に屬する素町人か、または職人などの娘でいもあるかのやうに、世間一般の感覺を喚起する風習になつてゐる。なほ阿魔と呼び阿魔ツ子と稱されるは、土鼠村は甚次郎兵衛の田舎娘の別名のやうな氣もし、凡ての各階級によつて呼聲も自から相違するのは、少々變チキな様な次第で何となく妙味が殺かれるなど、生眞面目に云ふのもつまりは大正の社會には通りが悪いからである。



そこでまづ上流の娘さん達所謂令嬢の尊稱を浴せかけられて、天晴立派な令嬢に成り済ましてござる娘さんたちを一瞥すると、随分驚ろかざるを得ない御方々がなかく多いのである。徒らに父兄の臚に咬りついて虚榮に憧憬、白粉をぬり綺羅を飾り野卑な風俗を好みソレお茶だヤレお花だお琴は何うの、ピアノは斯うの、ヴァイオリンは何、ダンスは何、スケートが何とか御託宣遊されてシヤナラクナラとさるゝ、之れを好氣になつて見てござる親馬鹿チャンリンこそ其意を得ないやうだが、之れが現代の空氣とやら社會の風潮とやら、扱てもく呆れたもので御座る。

「あら、榮子さん、貴嬢のお召は中々好のねえ、何方でお求め遊ばしたの……三越……白木……」似合はないでせう、妾何だか質素過て變なのよ……これでも三越で別仕方にさせたのですわ」なアに似合はないことは無くツて……好いわ、ほんとうに三越は好わねえ」

「豊子さんもやつぱり三越のお得意様ね」左様なよ、ほらこの着物だつて御覽なさい、ちやんと三越の商標がついてるわよ」妾のにもあるのよ……花子さんは何時でも松屋だつてねえ」さう、松屋なんて幅が利かないは、上流の夫人方は大抵三越がお得意ですとね、あの店は三割方高いとか、品物が上等でないのも看板で賣附るのだとか、種々いひますが矢張りあそこの物でないと何だか肩身が狭いのよ、妾も同感よ……」

「あら貴嬢は金齒を入れたのね、何時……」

『今お氣が注いたの……妾疾くから入れてたのよ』左様、些とも氣が注かなかつたわ、眞個に何うした馬鹿でせうねえ……まア何うなすたの……お齒が悪かつたのですか、虫齒……『悪いといふ程でも無かつたんですわ、だけど、此の節金齒の一本や二本笑つたとき見えなくつては大正式の女性でないのよ、阿母さんなんか満足な齒を抜いて入齒をする事がありますかッてね、現代の空氣に觸れないもんだから大層不賛成だつたが、ヤツトの事で説破して目的を達したのは先月なのよ、まだ四週間にはならないわ……』さう、まア好ことよ、道理でお口元に眞個に愛嬌が出たわ、妾も入れやうか知らん』  
 『貴嬢のは入れなくても好わ、齒の間に細く入てるから却つて奥床

しく見えてよ』あら否やだ、些とも奥床しくは無いわ』

萬事がこんな調子でたゞ他愛もないことに浮々するのも、辛い世の中の荒き波路をまだ知らぬ一得であるが、其の初々しき幼稚氣なき素振にも虚榮の夢に走つて、奢侈を誇り華美を衒はんとする俗にはや馴れ、只管外形の美に戀々して精神の修養婦徳の發揮など顧みる處がないのである。只だ浮華輕佻の習俗を追ふことにのみ眼を注いで、上流婦人の惡弊を小い胸に羨望するさまの仄見えるも笑止いが、是れ等は女の以て生れた通有性で、別て若い女の心の發作を抑制し得られない短所を、明からさまに露出されたものと云ば、それ迄であるかのやうであるが、仔細に研究してみるとつまり自省心

に乏しいのが令嬢方に實現する氣質である。斯うした浮々とした氣  
 で居ても、やがて新しい家庭を組織するに至るのは其の身の義務で  
 ある、女として生れ出でたるからは何時か來たるべき場合のあるこ  
 とは自覺せぬものはない。で、新しい家庭を作る相手即ち異性の撰  
 擇に就ても心の中では迷ひに迷ひ、自分の安靜を求めには何物を  
 採るべきかを小さき胸を痛めるものである。然るにこの種の人々、  
 所謂令嬢を以て自ら許す娘さんたちになると、何れも多少の教育は  
 受けてゐる。嫁人道具の看板、その身に金箔を置くために女學校へ  
 も通ひ、箆笥が幾掉に着物が何荷といふ上置に、某學校出身とい  
 ふ外形の美を街ふ準備に汲々するのも近時の流行もので、只だ向上

心が高まり名譽心に眩惑して、何うやら新しい女と云へる飛び上り  
 のヤンチャにカブレて來た傾向がある。親しい朋友同士で將來の理  
 想を交換するにも「ちよいとく、貴嬢の理想とする夫は何：」  
 「そんな者は無くツてよ、可哀さうに……酷だわ」あら、怒らなく  
 ツても好のよ、妾、貴嬢に夫があると云やアしまいしさ」だツて  
 餘りだわ、唐突にそんな事を云つたツて解らしないわ」だけれどさ  
 お互に何うで新に家庭を組織しなければ成らないのだもの、心に描  
 く理想はきつとあるでせう。貴嬢だツて、舊式に自分の生涯同棲す  
 るものに對し、何でも構はないとたゞ一身を犠牲にする氣はないで  
 せう」『そら左様よ、理想に適しない共同生活なんか出來ないわ、

ねえ……軍人も勇ましくツて好が、尉官ぐらゐちや幅が利かないか  
 ら、矢張り外交官が好いと思つてるわ、地位は低いけれども妾書  
 記生でも我慢してよ、其の人の運さへよけりや奏任書記官になるは  
 雑作もないし、公使館附になると歐洲へも往かれるでせう……ホ、  
 ホ、『外交官なら昇給も速いし外國出張といふ企望もあるわね  
 え』領事ぐらゐになつても妾愉快だらうと思つてよ、『實業家も悪  
 くはないけれど、質素だから妾嫌ひさ……寧ろ飛行家なども好いわ  
 飛行機に同乗して結婚式を擧げるのも氣が利いてよ』飛行將校：  
 『將校となると軍人だから紀律が面倒臭いわ、それよりか民間飛行  
 家で自分の思ふまゝに空中を翔けるも愉快でせうねえ、眞個に文明

式だわ……ハイカラだよ』ちやア貴嬢の夫は飛行家で愛情の最も  
 深い、名譽ある候補者……』あら、まだ極つた譯ちや無くツてよ』  
 と云ふやうな露骨な會話が起るのである。つまりこの會話を能く味  
 つて分析してみると如何なるものであるか、其の撰擇の骨子と成ると  
 ころのものは何？『名譽』の一言で盡きるであらう、名譽と言へば  
 大層聞えがよいが、之れを換言すると虚榮なのである、則ち虚榮を  
 求めやうくに何れの方面に向つても發展を試みてゐるのである。  
 率直な眞面目な側が既に是れである、猶暗黒な方面を探索して秘  
 密の鑰を捻つたなら、随分アット魂消ざるを得ないのもあるが、外  
 形から觀察した令嬢氣質は先づザツと此様ものである。由來都會の

空氣は惡魔に支配されて、猛烈に女の弱點を發揮しつゝあるのだ。無教育な下司な女までが半纏着はと逡巡する迄に變化して來たのは、果して社會の罪であらうか、家庭のダラシないのであらうか、新時代の趨勢は喜ぶべきか將た悲しむべきか、流行を追はねば令嬢の價值が下つて野暮と呼ばれ、體面を保つて生存するに不可能であるのだから、特に令嬢を咎めるも酷であると、天の一方から辯護説も出さうだ、ハクシヨン〜〜。

### 政治家の細君

まだ日本では西洋の様に女子の參政權など云ふ素敵もない問題

に齟齬して騒ぐ跳つ返りはまだ無い様であるが、古風な三從説を墨守して主人の活躍に關せず焉で居るのも、何だか物足りないで現代の婦人としては敬服すべきでは無い。まして政治家を夫とするからには、政治といふものゝ匂ひ位はかいで居ないでは成らない、イザ鎌倉となる曉天には夫を幫助て奮闘するの勇氣が尤も必要である。天から我れは女であるから、女は政治上の事に關係するもので無いと、引込み思案に知らぬ顔の半兵衛さんは、明治以前は知らず大正に於ける政治家の細君たる資格はまづ落第である。

昔しから男子は敷居を跨ぐと七人の敵があると諺にも云ふところであるが、特に政治家である以上は常に反對者があるものである

何時も筒井順慶流で日和見主義ばかりを標榜して、都合の良ささうな方へベタリ／＼と附随するやうでは、到底一流の政治家たる資格が無いのである。苟且にも意見を立て抱負の實行を力めるからは、必ず反対者が現出して之れに抵抗を試みるものだ。何れにしても恒に活動主義を採つて征服者たらんと心懸け、飽くまでも被征服者たらざるを希がふのは普通である。殊に選挙競争などには如何なる悪戦苦闘も忍ばねばならない、斯る場合その細君たるものが政治的活動の渦中外に立つことは到底出来ないのである。

是に於いて政治家の細君質氣の世に表觀して來るのである。是れ等は稍や極端に失する傾きはあるが、實際にあつた生た例を假り

て來て此處に示して見やうと思ふ、それはツヒ此の間の總選挙の時であつた。主人は血眼になつて奮闘する、運動員は東奔西走敵情を觀察して時々刻々注進々々に、今朝の樂觀は乍ら悲觀と變つて青息吐息で只管防禦に、翠丸の上つたり下つたりする毎に、要るものは金である、運動費の有無は得票の關係を大ならしめるのだから、ケチ／＼して居たら今日の味力は乍ら裏切して、明日は敵となつて折角物した物も反対者の爲めに切崩され、ロアングリと開くばかりで高利貸に泣付いての融通も、残るは公正證書の幾枚が手許を困しめる種となるのである。此の場合細君たるもの安閑として中々お花の稽古處ではない、運動を名として喰ふは飲むはのゴロ附、羽織を着

て袴をはいて大言壯語で横柄面する政治ゴロが、貧僧の重ね齋とは此様ときだとばかり、ソレ運動費と片手を出せば、片手には盃を持つて腹膨らさうとする、其の臺所の賄ひは細君自身の手擥掛けて指揮官たらねば、テンやワンやになつて經濟はまるで滅茶／＼になる、この支拂ひは何れも一時お帳面政策に因るとしたところで幸ひに主人公の勢ひが好ければ出入の肴屋でも酒屋でも、または八百屋に至るまで、幾分心を許して御用を勤めるが、一朝旗色が悪くなる直様警戒される中を、縦横に切つて廻さねばならぬのだから随分苦しいのである。斯うなると中々主人の懐中ばかりを當にはできない。幾干あつても惜い金である、一六勝負に張る金である、飲食の

費用までを支辨するは到底難いものである。

『奥さんお米がなくなりました』と臺所から請求が來ると『左様かい、電話で注文したら好ぢやないか』『いま何時ものお米屋さんへ電話を掛けましたら、因劫を云ふぢやありませんか……彼の前のお拂ひを戴かれなければならぬ……』『おや、失敬なことを云ふのねえ、今日那さまは選舉競争でお忙しいので、家中火事場のやうな騒ぎだから、少し落付くと清潔にお拂ひをすると云つて遣れば好の……』『まア商人といふものは何といふ小さな丁簡だねえ』と辰己上つて見たもの、今直ぐ支度をしなければならぬのに、米櫃はカラ／＼と云ふ始末であつては『仕方がないよ、近所で取つておきな

……現金ぢやなくつてはクヅ／＼云ふだらうね、え、是れで……  
 と無理にも米は買ったが、酒がなくなる『お酒がなくなつたつて……  
 ……三河屋へ左様いつて遣んな』三河屋も今朝來ましたがイケ好ない  
 事ばかり云て、人の心も察しないで大きな聲で催促をしますのよ……  
 ……『さうかい、一體あの御用利は生意氣な奴だねえ、左様／＼最う  
 あんな家でお取りでないよ、昨日鈴木さんが投票を頼みに往つたら  
 私の家は反對黨ですから御免被りますと言たとさ、商人の癖に何と  
 か斷るにも言分ありさうなものぢやないかねえ』まア呆れつちま  
 ひますこと……御家なんかは好お得意様でありますのにねえ』左様  
 だよ、少し拂ひ後れたつて拂はないと云ふのぢや無し、彼様家では

最う取つて遣りますまいよ、反對黨だなんつて楯を突くやうな商人  
 は出入をさせないことだわ……彼の先の新店の酒屋へ往つて御覽  
 あすこは確に同主義者だと思ふよ、此の間も運動員の方が新店の酒  
 屋の主人は早稻田出の男で、〇〇黨後援會の會員だとか云てゐまし  
 たわ、同じ政見を以て立つ人なら此方をも援助するだらうから……  
 始めから左様云てお遣りよ、お前さんよこの御主人は後援會員だし  
 私の方でも後援會を看板に敵と鎗を削つてるのだとね……それだか  
 らお酒もお前さんとこのを取るやうにしたつて……『左様でござい  
 ますね、左様聞けば何様ものでも氣持の好いもので嬉しく思ひませ  
 う、眞個に奥さんは巧くお考へなさいますのねえ』油をかけては



往けないよ、だが考へて御覽な、政治家の細君だとか御新造さんだとか云れているから主人に反對する敵より假令いくら物でも買つてやるといふのは、敵に糧を與へるに等しい譯で何うしたつて不愉快なものですよ、夫れくらひの切盛りが出来なくつては家臺骨が弛んで了ふわね』おほうきに左様でございますね……旦那様の御主義とか申しますものに反對する敵はお臺所へ入れないやうにするが忠義ですな』忠義なんて難かしいことを云ふのぢやありませんが……彼の肴屋の吉公は、時々選舉が何うの斯うのと云てるやうぢや無いか……』はい、彼れは變挺な男で、大層〇〇會最負でございますわ肴屋なんかの癖に、お得意さまに勧誘に出懸けるさうです』ナニ、

あの肴屋は〇〇會最負ですと……其様ものからは最う買ては往けませんよ、〇〇會と云ふと最も強敵ではあるし妾ちつとも蟲が好かない』へーいさうですか油斷のならない事で、では肴屋モ……』と云てる處から、勝手口に威勢のよい牙々した聲で『肴屋でござい、今日はよろしう』と云つたが今の奥様の話しで女中が心得顔に『今日日はよくつてよ』

是れ等は只だ目先にチラ付く小事ではあるが、其の魂膽の面白いところがほの見える、事を主人の主義綱領の遠範に假りて、出入の商人にまで心を配り、反對黨とみると一厘一錢の利益をも與へない工夫に出づる處、即ち一舉兩得の策略、一方からいふと何だかけつ

三三二  
の穴の狭い嘲りは免れないけれど、政治家の細君たるものは此の位の氣轉がなくては先づくダメである。此の魂膽のうちに一種の蜃楼は描かれて、一朝主人が政權を握つたら乍ら大臣の椅子を占める、その曉天には細君たるものは大臣の夫人となるのであるから、外出するにも自働車に奇聲を放たせて、往來の人々を恐怖させ、ヌツと反くり返つて威嚴を示すことが出来るとの希望で、未來を夢みてノラリクラーリと日を送る、政治家の細君と遊人の嬖とはある點に於いては、頗る一致した處があつて、組織的系統的はその質氣なるものより除外される孤立者である。

### 新らしい女

一口に新しい女といふと若い水々した婦人、古い女といへばまるで年寄の皺クチャ婆さんであるべき筈だが、今の新しい女と稱されてゐる婦人になると、只だ若い水々した血色の好い青春の血に燃る鬼も十八番茶も出端的の御婦人方を指すのみではない、一種トツ拍子もない阿婆摺と申しては御氣の毒でちと語弊があるかも知れぬ、然りとて跳ね上りと申しても何となく禮節を缺くかも知れない、さアこうなると何う註を入れたら最も適切であらうか、要するに現代の空氣、文明の思想を充分に吸収して、腹の中で自由自在に消化し

た瓦斯を通用門から吐き出してゐる、一名ハイカラ女であるのだ。  
 新しい女といふ語は今日ではあまり勢力はない様であるが、一時  
 は非常に流行した語である。社會の一部には豪い凄いほどの勢力を  
 有つてゐるやうに、それ自身もそう思つて天下の先覺者である、女  
 の先醒者であると信じてゐる。又これを擔いで煽動あげる三文文士  
 は、自分のパンの爲め或ひはまた秘密の慾望の爲め、これを豪さう  
 に言ひ觸らしてドンチャン〜〜お太鼓を叩いてゐる、其の音の  
 響きはお會式に講中のお有難連が打つ團扇太鼓で、一貫三百何うで  
 も好いといふ音を世間に發してゐるから妙である。けれども新しい  
 女から飛び上つた思想を抱く凄い女どもは、自覺先醒を以て任じ頻

りに何事にも改良を叫んで、日本の女を皆自分等の宗旨に引附け、  
 男子なんかは糞草履を掴ませて願使しやうと云ふ權幕は怖ろしい程  
 である。随分思ひ切つた放縱生活を遣るもので、臆病な男子などは  
 其の日常の行爲を聞いたばかりで吃驚仰天して了ふほどであるから  
 五色酒を煽つての御詫宣を聞けばてんで身の毛も彌立つやうである  
 其曰くを聞くと「人間といふ上から考へて見ても、何も男といひ女  
 といふ區別があるべき理窟はないのだから、男だとか女だとか人類が  
 勝手に命名するのは只單に生理的關係の上に止まるのだわ、僅かの  
 形體の一局部に一寸と相異つたところがあるからの命名であるのだ  
 から、男女ともに根本的に人といふ人生上の啓發をせにや成らない

のだわ……』と云つてゐる。既に立場が此様とところにあるのだからして、其の口にする事や行ふことが實に思ひ切つた突飛にも成るのであらうが、阿諛男のおひやらかし半分の讃辭にグツト調子づいて自ら豪いものに成り濟まし、流石にまだ『我等に參政權を與へよ』との叫びは發しないが、カフェーへも浸りこむ、五色の酒を麥藁で飲み分けて得意がりもする、バーへも入りこんで一品料理に舌鼓を打つ、最う一つ進歩したのになると女の癖に酔拂らつて大道をヒョロメキながら放歌もやる、尙ほ呆れ果ざるを得ないのは待合入りや女郎買と洒落のめし、我れは我が懷中で遊ぶのである、待合や遊廓は男子ばかりの専有する場所ではないと、勝手に理窟をつけ、何の

憚りもなく朝歸りを街ふやうな光景がある、畢竟こゝに至ると寧ろ狂態に近接して巢鴨病院の患者たる資格を備へてゐるのである。

人間といふ廣い意見から云ふたなら根本的に男女の別がないのだと、大哲理を唱道して氣髓氣儘に跳ねまはり、意志の活動するに任せて盛んに自然主義を發展するが多い、而して無暗に自覺だとか開放だとか云ふ語を喜んで、齒のうくやうな事を稱して居る。斯様風であるから何事にも頓着なくパツパと遣つて憚るところがないから偏服も飾らず頗る如何にも天真爛漫らしく思へるが、ドツコイ其の點になると全然正反對の現象で、虚榮に憧憬することは滅法界に發達して、處女時代の美貌を何時までも續けたいと云ふ觀念が去

らないから、顔一面に縮緬皺が大波の如く出来てもすつかり白粉に塗り隠して、態と若々しい初心い態度を保つて異性からの視線を集めるに汲々してゐる。是れ等も其の最も言行の矛盾したる一つである。表看板だけを見るとまるで性慾の問題なんか見向きもしない様であるが、なか／＼そうではない自然に起る性慾の事に付て、口では立派などを云ふが異性を求めようと焦慮して居るのは甚だ滑稽である。打ち割つたその本心も全く以て神聖の愛の漲りから來るのでないから、其の御託宣がますます／＼面白い、曰く『男女の結婚といふものは、あれは好加減なもので神聖の結婚といふものが世間にあるのでせうか』なアに、神聖の結婚があるものですか』相互の愛情が一致

して結婚が初めて成立するのですもの、愛もなく情もなく只だ相互が先も何も考へずに結婚したとて……夫婦關係を保つたとて……是れで男女の結婚が認め得られませうかねえ』眞個に左様ですとも、今の結婚制度は女子の生涯に渡れる権力服従の關係であるのだから道徳にしても法律にしても皆男子の利己心の上に築きあげられたもので、女子を侮蔑すること甚だしいものぢやありませんか、こんな結婚が果して正當なものと言ひ得られるでせうかねえ、世間の女はみな男子の爲めに奴隷されて了つて、夫れに甘んじて居るから悪いのですわ、些つと骨つ節のあるものが出て救濟をしないと、女子はいよいよ卑屈に陥つてしまいますよ』然り、然り、大いに賛成です

わ、全く婦人の生涯は種族保存の必要の前に犠牲となつて了つて來ますからねえ』左様なよ、今の習慣の如く愛なくて、結婚し、自己の生活の保證を得んとする爲めに終生一個の男子の爲めに、晝となく夜となく驅役されるは婦人として忍び得るところではありませんわねえ』

大哲學的意見はまづ斯うである、道徳だとか貞操だとか云ふやうな問題は既に眼中にはない、自分が社會に生存する爲めに一人の男を守らねばならぬを浩歎する處、中々凄い怖ない特長を示して居るが、新しい女としても性慾問題に對する觀念からして絶対に結婚を拒むものは稀れだ、往々にして精神的に結婚して貞操……古風な貞

操を守る者は無いにしても、戸籍面の結婚をして單に愛の交換を欲するものは今もある。是れ等の人々は何といつて居るかと思ふと、決して結婚と云ふことを口にするを嫌ふて居る、一つには平生大言壯語して結婚を婦人の罪惡のやうに蹴散してゐた負惜みもあるが今其口にする言葉を聞いてみると『御結婚なすつたさうですね、お目出度う……』と若しかりに賀するものがあると『あら否だわね、妾……彼の人とね意氣が投合したんで共同生活してるのよ』と挨拶する。即ち自分は日本流の結婚をして男子に絶対服従したのでない種族保存の犠牲になつたのでないと裏書をする積りであるから凄しい。

新しい女だからつて素より女は女である、放縦生活はして居るもの、名稱は共同生活にしても異性と同棲して差向いで居たく無いことはないが、自分の自分を省みないで眼を高いところに注げ、外交官を夫にしたい、外交官となる男は第一男振が好くて語學が達者だ、そうすると折には夫と共に交際場裡に入ることが出来るとか、軍人は勇ましいが野暮臭いとか、文士や醫師も悪くはないが道樂者が多いとか、銀行會社員は萬事が華美で好いけれど、氣の利いたものは藝妓狂ひをする、素町人の御新造さんは野暮くさくつて成つて居られないと、斯ういふやうに中々撰擇が面倒だから、到底もお誂へ向のが口を開いて待て居ない、其のうちに段々年は取

る、もう自棄半分になる口癖に獨身／＼と終に獨身を標榜しながら、碌々共同生活もしないで、いつのまにか赤ン坊が生れるやうな極端なのが時折現れるのであるから面黒い。

### 山の手の奥さん

江戸時代の昔から山の手といふと、何でも總てのものが下町とは違つて蕭洒でない、濃厚として何處となく重くるしい風がある、語を換へていふと裏も表も意氣でない、つまり野暮であるのだ。一口に山の手ものと稱すると、無意氣でスツキリとした、何處となく灰汁ぬけのした處がなくつて、おまけにデコ／＼で雅致に乏しい風俗

を指し、ある意味から云ふと輕侮の詞にもなつたり又嘲笑の代名詞ともなつて居たのである。然れど時世の推移と共に、江戸風俗のストッキリした代表者の如く云れた、所謂下町ものも純粹の江戸ツ子は全く指を折るほどで、何處の馬の骨だか牛の骨だか區別もつかぬのが多い、一寸考へてみても通りすがりに振返つて見るやうな女は至つて少なく、意氣も野暮もないゴタ／＼の薩摩汁であるから、山の手ものと云ても敢て遜色はないやうであるが、何うもノテと來るとどこ迄も先入主となつてゐる故か、一種無意氣な風に感染してゐるやうである。持物や着物などでも、イヤに意氣がると兎角鷓的になつてきて、チグハグで釣合が取れないから不思議であるのだ。

ノテ者／＼と餘り大きな聲でも云れないけれど、流行の早い下駄屋さんに聞くと、下町の廢りものがまはると云ふし、呉服屋さんに聞くと、まづ同じバツトした柄でもノテ向きは野暮臭い嗜好で、奥床しいと云ふ風のもの地を掃つてない、それ等は畢竟するにお價値の關係から來るのもあらうが、矢張昔時の屋敷の野暮風が残つてゐると云ふのであらう。同じノテでも意氣なものもあるが、土地の風俗は仕方がないので、手近な例が藝妓などからしても何處やら灰汁脱けがしない。

斯う山の手攻撃をやると、暗の夜に向牖を打つ拂はれるかも知れないが、何構ふことは無い、嘘八百で固めるチャラツポコで無い。



事實有ることを有ると云ふのだから、決してビクともするンぢやねえさ。まア最う少し棚卸しを確的に遣らかし、一々に證據を擧げて娘子軍を將棊朴しにするまで參るのだ、御婦人の最も氣にする頭髪にしても左様だ、デコくの丸鬘を御覽なさい、多くは流行後れで鬘の形でも、下町で新流行のチラく興つて來る頃、ヤットゴさで其の形が中流以上の奥さんの頭に乗ツかるのだ、御大典型とやら俗に云てゐる鬘の滅法張り出した風でも、ノテで結び出したは遙か後の事である。そんな流行廢りの早いものは暫く措いて、着物でもソグはぬ風をして得々とされるのはノテ女に多い、それや下町にでも随分そんなものは有るけれど、ノテ者と同一な扮装をして天晴奥さ

ん氣取で押歩くは、田舎出の女でなければ先づ稀れである、チャキチャキの下町育ちのものには藥にしたくも無い圖である。お召縮緬の重ねの下からメリンスの長襦袢が顔を出したり、紋附の下に縞物の重ねを着る、紋服に腹合の鯨帯をお太鼓に結す、銘仙の着物の上に縮緬の半コートを引つ被ける、お客さまのあつたときカバを穿たまゝで座敷へ飛び出す、指に幾個もピカく光る指環をはめてゐて、レーザ表の吾妻下駄で頓着なく歩く、最う一杯念の入つたのに成ると女優鬘とやら結びとやらで、白粉コテくの厚化粧に額の皺を隠し、四十振袖でも着さうな勢ひは、如何にノテ風の奥さん質氣だからツて、嘔吐を催しさうな扮装でイヤハヤ呆れが禮に來るほど

である。

斯ういふ奥さん方の癖として、其の勿體ぶることは中々尋常でない、下女でも伴れて外出することがあると、ツインと済して自分ほど豪いものはない、イヤ美しい新流行を追ふた人はあるまいと、下女が奥さんと聲をかけても聲えないのかカラ鬢なのか、平氣の平左衛門でお歩ひである。もしかして電車にでも乗らふものなら態と回数券を下女に渡して、車掌に切らせるほどだから、回数券をその儘預けてでもおくのかと思ふと豈計らんやだ、乗車の人数だけ切取つて渡した後は、帯の間へ後生大事に押込んで、それでも尙ほ氣になるかして上からポン／＼と二ツ三ツ敲いて置くのも面白い。應揚

に見せても何處にかコス辛い、八百屋魚屋の買ひ物にも臺所へ首をツン出して、言直で買うは損と懷中勘定から一錢でも直切らねば、氣が濟まないと云ふお里がチラ／＼此様世間體を作る、衆人稠座の中でも遠慮なく表はして居る。是れもノテの奥さんに限る譯ではないが、此の種の系統を有する奥さん方は多くノテに巢をくつて、相應な家屋にチント住つて居られる向きにあるから、またノテ氣質の一ツに數へ擧げるに敢て憚らないのである。

同じ中流生活をするものでも、種々あつて中流中にまた幾階段もあるが、稍や低い程度にある奥さん方に方面を一轉して見ると、其の行き方は大差ないまでも、また趣きの變つたノテ質氣が発見され

る。何れの家庭でも少し體裁を飾るところの奥さんは、挿花を頻りにお遣りになる、活花は殊にノテに流行てゐるので、これを遣らな  
いと奥さんの肩身が狭いと云ふやうな風になつて、お稽古に出懸け  
になるも多いから、お稽古日には古新聞にお花を包んで、之れ見て  
くれ妾もお花を遣つて居りますよと、意氣揚々提げてお歸りになつ  
た上で、筒花活にお挿しに成るとき形が崩れやうが、眞が横ソツポ  
へ曲らうが、其様ことは一向にお構ひなく、お天狗さままで矢鱈にお  
許しを急いで居られる。その奥さん方も夜分になると縦や新チリで  
も、半コートや被布を紡績の上に引つ被けの襪褌かくし、散歩と稱  
して彼方此方からお出懸けになる『お隣の奥さんですか、何方へお

出懸あそばすの……』「あら、鈴木さんの奥さんですか、意外失禮を  
致しましたこと、なアにね、一寸と散歩に……貴婦は……』「妾も今  
ブラ／＼散歩に參つて來ましたわ』左様でしたか、最うお歸りなの  
ですか、大層お早いちやありませんか』と話てゐる所謂奥さんなる  
人は、古新聞に包んだものを捧げてゐなさる、其の新聞の破れたと  
ころから青いものがチラチラと見えてゐる、散歩と云ふからは夜分  
お花のお稽古でない事は知れてゐるのだ、其の青きものは果して何  
であらうか問題である。此方はヘン散歩もないものだよ、八百屋へ  
買物に往つた癖に、イヤーに體裁を造つてるのねえと腹の内に嘲つ  
た、其の當人は何うであるか、同じく八百屋へ買物に往くのである

葱や人參午莠などを買ひこみ、袂をガサ／＼云せると古新聞が飛び出す、之れにクル／＼と巻いて提げて見たが、何うも氣になる、袖で抱へて見たが尙ほ下から出る、而も葱の枯れツ葉が巻いた古新聞よりハミ出してゐるに、奥さん一方ならず氣を揉み、前後左右を顧み手早く被布の下に忍ばせ、我れながら智者であるよ、是れなら八百屋の買物とはお釋迦様でも御存じあるまいと、態とブラリ／＼と引き返すうち、人參一本ツルリ迂り抜けて足元へ轉がつたに、奥さんの顔の色は人參の色より赤くなつた。ア、罪の深い買物よ、是れに類したお買物、見得を専らとする滑稽劇はノテの奥さん質氣中に特筆すべきものであるのだ、ア、餘り穿くり立てるも要なき惡ま

れ業であるから、こゝ等で失敬して置くが兩爲めであらう。

### 下町の女

女として好いものが着たい、小サツパリとした扮装が仕度といふのは、醜と美との差別なく、都會に住むもの田舎に燻ぶるもの、別け隔てなく、乃至老幼に限らず殊に若いものには誰れでも望む處の女の通有性であつて其點となると貴きも賤しきもない心理状態である、只それがその階級に依て慾望を充さうとする程度が幾分か異なるまで、情の發向する點に於いては皆な同一の經路を歩んで行くのだが、由來下町といふと所謂商家の多いところ、國家の大法に抵觸

せない以上は獨立獨行少しも他の制肘などをうけて束縛される煩ひがないから、始めから自己の欲する處に向つて進行がされる、懷ろ都合つまり經濟上の許す限りは凡て自己本位であつて更に遠慮しくも宜いのである。是れに反して山の手や屋敷町となつてくると、今でこそ一列一對何の境界もないが、昔は多く屋敷者と稱へられて幕臣でなければ大小名の扶持に浴するものか、或は小糠三合貰つても残らず白痴脅しに赤鯛の田樂挿で、肩臂張つては居るが自由の行道は取れなかつたものである。然れど同じ野暮天の名は得て居ても下町に住む屋敷者になると、四圍の空氣に觸れて見やう見眞似で段々其の風俗に馴れて來て、中々侮り難い尤物は随分あつたが、それ

等はまづ除外例として全般を覆へす料とはならない。

此に云ふ下町の女といふのは昔は江戸つ子の代表的女であつた、勿論藝妓のごとき者を指したのではない、眞面目な素人側を代表した稱である。意氣といふ事を有難かつた時代の要求に應じた表顯であつたかも知れぬが、所謂江戸ツ子の女といふとスツキリとした厭味の無い、寧ろ淡泊過ぎるほどサツパリとして五月の鯉の吹流しと云れる氣象が閃めてゐた。其の面の輪廓や丈のノツポやデクくの珍竺林やは暫くおいて、美人と云す醜婦と云す、アツサリした氣分が自然の態度に現示されて居たのである。今は下町にも此時代表的の女は稀れで、土一升金一升といはれてゐた目貫に住む、舊家と

ても殆とない始末で、數代連綿として江戸の商人を代表する家などは幾軒しか無いと云ふやうな成行きである。従つて江戸の下町に聲名を博した女風俗は、變りに變つて意氣だか野暮だかちつとも解らない變挺な風に化して了ひ、僅に待合の女將とか割烹店の内儀とか乃至藝妓屋のおツかアとかにわづかに面影だけは残して居る位である。けれども腸に至つては天地の相違で、とてもく江戸ツ子の江の字ほどにも往かぬ、夫れ等を標準として下町もの、女を語るのはとても、不可能事である。古くから稱揚されて來た所の純粹の女下町式瀟洒な女は求めるはほとんど難いが、商家に於ける細君、家庭の舊套を逐ふて家憲を改めない家の内儀に、所謂下町風なるもの

、幾分か遺つて居るを見ることがある、意氣な風俗を稱讚した意味からは、今では最う凡てに面影が無いと云ても好いほどであるけれど、何處となく名残はあるもので、山の手育ちと並べて見ると、とつかしかに違ふ點はある。物は何でも眞ツ正面から研究したら化者の共進會でも、後背から見たら瘦ぎすは瘦ぎすなりに、肥ツチヨは肥ツチヨなりに、十一文甲高の足袋を穿きさうな風には見えない何處やらに品もあれば風情もある、下町の特長は自から其の風姿に現れて居るのも奇妙である。

個人の性格によつて一概に之れを總括するのはなかく困難である、強てそれを一括しやうとすると恐らく正鴻を射ることは出来ぬ

が、古來から流れ來つた下町の風俗、それに養成されて染込んでゐる女が家庭の人と成つた結果は、いくら現代の空氣に接觸しても其の氣分の失せるものではない、吝嗇はしみつたれなりに派出者は派出者なりに繼承してゐる。一寸とした例ではあるが小供を小學校へ通はすにしても、お隣の凸ちやんは靴をはいて居る、家の茶目が草履を穿てゐては幅が利かない、お向ふのお跳ちやんがメリンスの被布を着てゐる、家の千代ばかり紡績緋では肩身が狭いと云ふやうな譯で、萬事がこう云ふ筆法で往つて居る。左様かといつて近所で甘い御馳走を喰べてゐるから、家でも御馳走を喰べないと外聞が悪いと云ひもしないところをみると、外形に現れることに就て特別にこ

の弊があつて、細君達が如何に體裁を繕ふ様があり／＼と讀めるではないか、つまり一種の虚榮には違ひないが、則ち江戸つ子氣象から來る負けじ魂の發作であらうと思はれる、廣く云へば社會一般の人にあるところの企望の表顯であらう。

外廓の美といふことが四圍の潮流に誘られて、下町生活者の家庭を浸し始め、知らず識らず派出に傾ぶき來て、ケチと云ふことが江戸つ子に取つては、まるで一種の罪惡であるかのやうに見られて彼の宵越の錢は持ぬと威張る肌合を生じるので、同じ階級のものに負けたり引けを取つたりするのを、此の上もない不名譽の如くに感じて嫌ふのである。さうだから人がお花見に出懸けるといふと『今

日の新聞に上野の花が咲き出したと出ておりましたよ、今度の日曜には是非まゐりませうね、グツ／＼して居るとまた見損なつて了ふわ』  
 なんかとさも得意氣に無理算段をしても出掛けやうとする見得坊となるのである、たゞ花見の方に限らず、別て下町の女に嗜好力のヨリ多くあるところの演劇などになると尙ほより以上甚しいのである。新富座が好いと云ふと何を措いても観たくなる、歌舞伎座が面白といふと家に尻が落付かず飛び出したくなる、曰く帝劇、曰く明治座、曰く本郷座と云ふやうに處構はず出懸けるが、往けば必ず相應の觀劇料を要するのは普通だが、そんな事は更にく／＼意に介しないやうである。そうすると下町の女はみんな有福で自分の嗜好を

充すに差支へない資力があつて、閑暇人ばかりであるかと云と、何うして／＼其様に資力の續く者は先づ稀れである、一家の家庭を押へてゐるものでそう何時も／＼閑暇な人はない、娘か隠居さんなら知らぬことだが、それとてポカ／＼遊んでばかりゐられる身分の者は多くはないのに、觀る物聴くものにチヨイ／＼出る、出るとなると腰辯先生の細君などのやうに、蕎麥屋か鮎屋に空腹を凌いだり、活動寫真なんかで満足する連中ではないのである。必ずや小料理屋ぐらゐには入つて食事をする、芝居なんかだつたら屹度追込みや立見で堪能する側ではない、殊に小供でも伴れてゐるとなると種々な費澤を云ふのを、假令ホイ／＼と許さぬまでが散財が嵩むで來るのは



當然である。こんな風に萬事生活に娛樂に派出な事をして樂觀的に世を送るのが、下町の女たるもの、特長である、それがやがて下町の女たるもの、純然たる氣質と云れるのである。

大店向の商家などや厳格な家庭などになると、全然斯うした特長などは勿論ある筈はないが、下町の女を代表する側になると、その俗の意氣と云ふよりは、現代ではほとんど斯くの如き光景に變化して居る。唯だ一つ斷つて置かねばならぬのは、下町の女は派出なことは何處までも好むが其れは虛榮心に駆られて自己の爲しつゝある暢氣を誇らんとする様な、野心から來たるのでは無くて、多くは無意識な無邪氣な發作にあるのだから、頼もしいのである。幾分江戸

時代の潮の漲りが残つて僅に流れて居るところが面白いのである。

### 電話の交換手

電話は段々増加されて來た、文明が進めば進むだけ益々發達してくるのは電話である。現在の東京市中で毎日取扱はるゝ通話が約五十萬平均ぐらゐで、之れを萬遍なく取扱つてゐる交換手は約三千餘名と外に見習生が五百餘名あるのである、交換手や見習生は無論みな女の職業であつて、何れも女の役人である、つまり官吏であるのだ。

交換手ほど樂さうに見えて樂で無いものは外にはあるまいと、彼

等は常にコボして居るも無理からの事で、同情の價値は十分にある  
 對手が公衆であるから深切丁寧に應接せねばならぬし、接續を敏捷  
 にせねばならない、左もないと怒鳴散らされた揚句の果てが「この  
 ドタ福奴何をグヅ／＼して居あがるんだ、早く繼がねえか」と無遠  
 慮に自焦られる上に「監督をよべ……六百番を出せ……」なんかと  
 喧嘩腰であるから溜らない。此様な場合でも柳に風で受け流し、逆  
 らはず職務を盡さねばならない、偶にはいくら勤めだと思つても、  
 劍突の一ツや二ツ位はくれ度なるものだが、ひよつと其那ことでも  
 あると其こそ大變監督者から大ガリを喰て、散々油を取られて叱り  
 飛ばされて了ふ、嗚呼人生電話の交換手には誰れがなると嗟嘆するも

あるさうだ。

「綾尾さん暫らくねえ、今お歸りですか……」  
 「あらまア、岡田さん  
 眞個にお久し振だことねえ、妾いま歸りなのよ」  
 「好わねえ、左様して  
 獨立して居なさるから……」  
 「些とも好くはないの……」  
 「妾もね、  
 事務員にもなれば、展覽會なんかの看守にもなつて見たのよ、だけ  
 れど面白くないから寧ろ交換手に成らうと思つて、此間志願書を出  
 したわ」  
 「貴嬢、まア此様ことに志願するより女店員か……」  
 「會社の事  
 務員に成つた方が好いのねえ」  
 「事務員はダメよ」  
 「交換手よりは餘  
 程好くツて……」  
 「眞個にこんな忙がしくつて詰らない職業はなくつて  
 よ」  
 「それでも貴嬢なんかは好わ、何處の店員だなんてえより、判任

官待遇の官吏だもの……『そりやね、官吏には違ひないけれど考へてみると詰らないわ』と云つてゐるが、其の忙がしいのも其の詰らないのも、一に判任官待遇といふ此の肩書に戀々するのである、又判任官待遇の地位を占めやうとする小さな名譽心、或ひは全くの判任官となつて同輩に羨まされたいの向上心があるばかりで、辛いことも忙がしいことも克己心を起して奮闘するのが多い、此の名譽心と向上心が無かつたなら、電話の交換手が何時までもして居られるもので無いのである。

交換局は見得を張る處ではない、忙しい職業しかも社會的の業務を行ふ處である、同僚間だからと云てツベコベ……話をして

興じ狂ふことは全然出来ない事である。然うだから女の特有な虚榮心を誘ふ機会がない、白粉を塗つて着物を着飾つてお尻を撫で廻す暇がない、極めて質素で簡單でノラクラする事の出来ない職業である。殊に取締は嚴重になつて居るのだから、いくら青春の血に燃える若い女が多くても、何等の危険は無いと監督する人々は云てゐるけれど、守る者に油断はあつても窺ふ者に油断はない世の中である一に交換手氣質といふ一つの氣流は何處の交換局内にも漲つて居るものである。彼れ等とても女である以上は異性をおもふのは當然で、随分他人の妾になつてゐるものもあるし、情夫狂ひをして居る者もあれば、内縁の妻に成り済して何喰の顔で通つて居るものもあ

る、また誘ふ水あらばとしやなくなりと品を作るのもある。こんな風だからもし異性の言葉に觸れるといふことが、其の男の顔までがさも想像されて一種の快心與へるそうである、いま優しい美しい聲でモシ／＼と云れると何となく愉快なものなので「浅野さん／＼貴嬢は今日は……」『あら、荒井さんは唐突に何を云てるのさ、只だ今日はと云たつて何の事だか解らしないわ』『そうですか、大きに悪うございましたね、ハイ御免なさい……』『あら怒りつばいのね、妾が一寸と擲揄と直ぐあれだもの……困つちまうわ』何にも怒らしないが、浅野さんは餘りだわよ、自分だつて唐突に今日は幾個なんて聞くことがある癖に……』『ホ、、彼れの事なの……好男子……』

と云て俄に口を袖で隠した。此方も微笑して『左様なのよ……今日は幾人……』『妾は二人つきりよ……だかね、一人は何うも疑問に屬するのよ、些と聲がシャ枯てゐたから、ソラ何時かのやうに白髪のジャンコ面かも知れなくつてよ』『おや、否やだね何うしてジャンコ面が貴嬢に分るのでせう』『分らあしないがね、優しい可愛らしい聲でも何處かに變な調子があるからさ』『聲が變でもジャンコがあると極つたものぢやないわ』『だけれど彼れは失望だとすると、可哀さうぢやありませんか只の一つのよ』『妾やこれだけよ』とさも自慢さうに片手を出して見せた『へい、其様に……まあ慾張つてることね貴嬢は幸福家だこと……』『だつて、皆さうか何うだか知れないわ、

顔が見えるのぢや無し、ホンの想像だもの……つまらないわね『何うせ、そりや想像に極つてるが、まわお目出度……貴嬢、何を驕るのよ』眞個にこの人は喰しんぼだことねえ』と云ふやうな罪のない談話が少しでも暇があつたり、また歸り路などに交換されるのであるが、實に詰らない幼稚氣ないことであるとは云ふものゝ、目のまはる程に忙がしい中で、通話者の聲を聞き分けて、好男子と鑑定して其の話を接續するを喜ぶところなんか畢竟するに自己の弱點に慰籍を與へて、繁忙を一時忘るゝまでである。

一面には斯ういふ暢氣な處はあるが、交換手になる女は意志の弱い忍耐力のない者にはとても勤め切れるものではない、一年中で尤

も忙がしい時は十二月の二十日過からで、一月元日の曉方までであるが、就中身體が綿のやうに疲れててんで口も利き得ないのは三十日と三十一日であるそうである。此の日なんかとなると百萬以上の通話があるといふ事である、これを一々接觸しなければ成らないのだもの忙しい筈である。其の代り一月の初めになると交換手だつてもお正月は来る、常には受話機を頭に戴いて居ねばならないから、日本髪に結ふことは絶対に禁じてあるが、新年となると七草までは特別に随意的髪に結ふことが許されてあるので、文金高島田に結つて嬉しがるもの、桃割に結ひて終始頭髪を大切にすもの、思はぬ人が丸鬚に赤い手柄を掛けて来るのもあつて、顔も聲も浮々して『何番』

と云ふさへ勇ましく聞える。小人閑居して不善を爲すとかで、此様やうな少しでも伸びりとした暇のある際は、例の聲によつて中にはチウ〜と鼠鳴をして、監督からお目玉の初物を喰ひ、新年早々面を脹らしてプウ〜云ふのもある。

交換局内に於ける交換手としては、凡て規則に縛られ嚴重な取締りに拘束されて、其の特種の氣質を發揮する餘地がないけれど、まあ判任官まで漕ぎつけてどうにかこうにか企望の幾分を達したとなつて、扉一枚開いて外出すると、まるで空気が自から變つて来る、随つて彼等の気分も自から異つて来るので放縱に流れて自墮落に沈み、汗紛屋や蕎麥屋へ入るも多く、一進歩したのは随分一品料

理へ飛込むもある位で、是れ等の側になつてくると例の新しい女の卵位の活躍は大丈夫やる様になる、こんな結果から所謂共同生活に憂き身を窶したりして、辭職をするものが約四分の一はあると消息通は鼻を蠢かして喋舌り立てゝある、知らず果して如何のものであらうか、兎に角身持と云ふことに就て一般の上から甚だ好ましからぬのが、交換手氣質の一部に數へ擧げられるは甚だ遺憾である。

### 舊思想の姑さん

世間で中の悪いものゝ事を例へて犬と猿といふし、まだ嫁と姑とも云ふが、犬と猿は絶對的相容れないものでもないらしい、監督

舊思想の姑さん

者の如何に依ては歪みあつてばかりは居ないものである。犬の背中に猿を騎せて歩く香具師もある程だ、然し嫁と姑となると中々そうはいかぬ『お彼岸會嫁の小言の捨どころ』なんかと言つてゐる位で女大學的の教育を受けて、長上のものには絶対に反抗の出来ないものとしてある、舊時代の姑ですらお嫁さんが意の如くならないつて、彼れ是れ面倒な騒ぎを惹起すことが往々あつたものだが、特に現代の空氣に觸れてゐる學校出身のお嫁さんとなつてくると、昔質氣で押し通さうとする姑とは如何したつて反が合はふ筈がない。餘程發明な目から鼻へ抜けるやうなお嫁さんで、姑の胸中を甘く測量して巧く阿母さんくと鬪弄し得るものは知らぬこと、大方

は姑婆さんの古いく舊思想と、お嫁さんの學校仕込の新思想との衝突は是非免れない。其の衝突が次第くく嫁と姑の間を隔て、くるので家庭の風波は到底治まりつこはない。爲めに年中ゴタくする、そこで姑は斯うなると親風を吹き散らかして威壓を試みる様になるし、嫁は亦人權を楯にとつてどうしても伏従しない事になるのである。

優しいお嫁さんで平常から何事にも阿母さんくと下手に出て居ても、何う云ふものか姑の心の儘には成らぬもので、何事に係らず若い者には困る困ると面白からぬ感情を抱くものである。ましてや些とばかりの學問を鼻にかけ、何にも知らぬ癖に姑風を吹かして

と自惚るお嫁さんに於いてをやである。斯様になると『何だ生意氣に學問く〜と鼻の先にブラ下げ、二口目には教育が何うだの斯うだのと、當こすつて凹こまさうとするのが癪に障る……』と常に不平の心が腹中に漲つて何でも目鏡越に見てゐるのだから、お嫁さんの爲ることなどは皆自分の意志に違つて、態と反抗するかのやうに邪推が兆して來るのである。一寸としたことで云つて見ても姑婆さんの心では、お彼岸の中日などなら先づ何をおいても先祖のお寺詣りと云ふところであると思ふのに、若いお嫁さんの側になつてみると、此の日は祭日である。春の彼岸でも秋の彼岸でも散歩には最も好時節である。お寺詣りだつて全然氣が注てしない譯ではない、

てんで頭の中にはお寺詣りなんかと云ふ古臭い考へは浮ばないで、たゞ家を出たがつて到頭宿六を誘ひ出して、諸所方々を浮れ歩くものだから姑さん、さあ腹の蟲がムカ〜して來て堪られないから常には奥の部屋に蟄居して滅多に出ない者が、花見虱の上這ひと云ふ様な有様でノソリ〜勝手元へ出で來る。お饗どんは今日は半日の骨休め、鬼のぬ間に洗濯と云ふ考へで伸び〜となつて假寢をしてゐる。處へ婆さんがやつてくるから堪らない、これを見ると又ムラ〜と癪だ『まあ呆れたこれだもの、呆れてものが言れないよ眞實に若い者は示しが利かないから仕方がないねえ、だものだから奉公人にまで斯う馬鹿にされてゐるのだ……お鍋もお鍋だよ、若夫



婦がいくら出懸たつても家にはチャンと私と云ふ者が留守をしてゐるのに、此の體裁は何うだ、之れと云ふのも平生から若い者夫婦が私を邪魔にして、厄介者のやうに取扱つてゐるを見やう見真似に、奉公人の分才で主人の親を僉末にするのだな、ア、否やだ、早く阿彌陀さまのお傍へ往つて何事も知らないやうになりたい』など、真面目くさつて云ふがてんで嘘の皮である、狎猫婆アと云て兎角出しや張りたがるものゝ三幅對の一つであるから、屁を被つたやうなことに若い者が相談しないと満々たる不平に身を焦してゐる癖に……お慶どんが此の態度を黙過することは到底出来るものでない、乍ら足音高くドン／＼と遣るのでお慶どんは思はず目を覺して見る

と、隠居さんが立つてゐる、平生から若奥さんが困つてゐなされる人だと思ふものだから、吃驚して起きると婆さんこれを横目に睨んでお臺所へ足を踏みこんだ。

臺所はこれお慶どんの責任ある區域内である、何事か體裁の能くない事が發見したら最後直ぐ雷様は頭上に墜落するに極つてゐるのだ、案に違はずやがて呼れた『お鍋！お鍋！』へーい……『お臺所は成るだけ手忠實に片付けて置かないと往けませんよ、お前だつて最うお嫁に往かねばならぬのだからね、奉公人を使ふやうな身になつても、お臺所を奉公人任せにしては成りませんが、人の家でチャンと取締りが付てゐるか居ないかを見るのにやまあ臺所を一目見

れはよく解ります、こんな事になるのも皆なお前が悪いのではない  
 奥さんが遣つ放しだから斯うなるのだ、私の臺所へ顔を出す時分  
 はこんなダラシのない事はさせて置かなかつたよ、何だ學校で何う  
 だの斯うだのと、二口目には學校風を吹かせて年寄を脅かさうと思  
 つてもね、左様は問屋が卸すものか……監督く〜と口先ばかり伶俐  
 さうなことを喋舌つても此のざまは何うだらう、今時のお嫁さんは  
 オ、怖ないことだ……」と獨り頬桁をたゝいて目をキヨロ〜させ  
 臺所の戸棚へ手がかゝつた、こゝを檢査して溜飲を吐く材料の蒐集  
 を爲すのである。

第一に婆さんの目に映じたは戸棚の内の亂雜で、血の滴るやうな

肉片が竹の皮よりハミ出してゐる、傍らには腐れかゝつたジャガ芋  
 が黴を生じて轉がつてゐる、お味噌が竹の皮に包んだまゝで開き放  
 しになつて、皮の外までダラシなく附着て居る、さあ是れを見ると  
 心あるものは婆さんならずとも眉を顰めるが、別て嫁に對する一種  
 の惡感情からして觀る姑婆さんであるから「オヤ〜まあ、此の體  
 裁つてたら何です、奥さんの學問の出来るにも困つたものですね、  
 此の肉は何時取つたのかい」昨日お取りになりましたので……「遣  
 はなかつたの……」「いゝえ、昨晚お使ひなされましたのですが、注  
 文より一斤ばかり多く持て参りましたので、お使ひ餘しになつたの  
 でございます」「何時も、いくら程づゝ取りますえ」「大抵三斤ぐらひ

お取りになります』肉を三斤取りますかい、是れは一斤いくら肉  
 です……『六十五銭か七十銭でございませうと思ひます』何だい、  
 一斤六十五銭からするものを三斤も取るのですか、其様ことをして  
 堪るものでないよ、經濟が何うだのヤレ時間經濟が何とやら、口巧  
 者なことを仰やる奥さんが是れでは身上が續くものでない、忤も困  
 つたものだ、彼様女に話られて了つて座蒲團に成つてるとは可哀さ  
 うだ……私が何とか家の爲めになるやうにと思つて口を出すと、又  
 阿母さんがと無理でも云ふやうに嫁の顔が變になる、ブーと頬の脹  
 れるのが見えますよ、はい、あの祿でもない顔に種々匂ひの高い、  
 西洋のものを塗りくつて奥さん風を吹かせて好氣に成つてる小面が

憎いわ……何かいへば阿母さんは左様仰やいますが、阿母さんのお  
 若い時分と當時とは世間の事が違つてます、第一の女子の教育から  
 異つて居ますのだから、現代の社會に生活するには現代の空氣を吸  
 はないと、世の生存競争に負けるなんて、馬鹿なことを云て年寄を  
 遣り込めやうとしてる……ア、否やだ、内のお嫁さんのやうな  
 のが世間にあらうか』と嘆息する。

こゝが舊思想と新思想の衝突點であるといふことが出来るか、姑  
 婆さんの嘆ずる處もまた大いに參酌すべき點がある。嫁に對する僻  
 見より生ずる姑氣質なるものゝ、因て來たる處を追窮して往くと  
 現代のお嫁さんは多く其の本分を盡さうとしないから、一層嫁と姑

八四  
の間に懸隔を生じ、犬猿ならぬ睨み合に面白からぬ月日を送らねばならぬのである。

### 新思想のお嫁さん

「ねえ貴郎、家の阿母さんは何うして彼様なのでせうかね……私  
する事は一から十までお氣に入らないやうで困つてしまひますわ」  
「其様ことは無からうよ」そりやアね、貴郎には血を分た親御……  
大切な親御さんですから、此様ことを申したらさも氣拙いかも知れ  
ませんが、如何に古風な家庭で育つた頑冥不靈の質だからつて、餘  
り酷い人だと思つてるのよ」どうもね春さんと妙に氣が合ないのに

や困るはねえ、何ういふ譯だらうか知らん、世間の人は別段鬼婆ア  
とも云ないところを見ると、さうく無理非道を云てお前さんばか  
りを困しめやうと云ふ氣もあるまいと思ふがね」左様よ、そりや殊  
更に苛めやうと云ふのでも無いかも知れなくつてよ、けれどもね其  
の一舉一動が私に當つてゐるのだから遣り切れないぢやありません  
か、昔から姑や小姑は煩いものと相場は極つてますがね、家の阿母  
さん見たいなイコチな、他人の前ではお體裁をつくつて置いて、陰  
にまはると嫁が年寄を邪魔者にして龜末にするなんて、貴郎でも、  
こんな事をお聞きになつたら好意持はしますまいがね、當面に立つ  
身では尙更堪つたものぢやありませんわ……それに貴郎は家の事は

何も御存知ないでせうがね、私が晝間貴郎の留守にお湯にでも出ると、その跡へ阿母さんがヒヨコ〜臺所へ出てお出でになつてさ、戸柵の中でも其處等にあるものでも一々検査をなさいますとさ……なアに検査を爲さつても少しも疚しいことは仕てありませんから、私の方は平氣ですがね、此間もさうですよ、貴郎と散歩に出ました時に阿母さんが例の通り臺所へお出懸になつて、隅から隅までお調べになつてホラ其前の日にフライを拵へて肉が些とばかり残つて居たでせう、彼れだつてねえ、其の時は何も餘計のものを拵へて無理に喰べて了なくつても、翌日に残しておいてお料理の材料につかへば、其の日の費用がそれだけ減すると、妾しや經濟的の考へで残し

ておいたのですよ、其れを何うです、喰べもしない肉をこんなにか買ひ込んで冗をする、何して内の嫁はこうなんだらう、此様ことをするやうではとても身上が堪らないと、お鍋に向つて豪いお談義だつたさうですわ『困るなア、お母さんもお母さんだね、何も阿母さんを困らしておく譯ぢやなし、留守に臺所などへうろ〜出て來なくても好のにね……』『そこが姑根性といふのですよ……昔の姑さんは何うかして嫁の落度を見付て苛めてやらうと、毎日そればかりを考へてゐるのですわ、私なんか、何と云れたつて構なくてよ、貴郎がチャンと私の氣を知つて居らつしやるからねえ』『春さんと僕とは學校時代から趣味の投合した結果斯うして新しい家庭を作つてゐるの

だもの、お互に少しも分け隔てはないのさ』左様よ、感謝……』まア仕方がない、阿母さんは現代の空氣に觸れない舊思想の凝結た人として除外例にしておくより仕方がないさ』蔭でいはれることは何とでも好きに言して置きますがね、目の前で間違つたことを言れると何うも黙つて居られなくつてよ、それに彼様にまでして他人の過失を探したいのでせうか……左様く、二三日前私が感冒で早く寢てゐたときね、貴郎のお休みになると直ぐ私が小便に起きたでせう彼の時驚いたわ、次の間に誰れだか立聞きをして居るものがあつたのですよ、直ぐに貴郎に云ふかと思つたが、何かなんでも餘りだから言なかつたのですわ、何うして其様にまで爲さるのでせう、私に

は理由がサツパリ解りませぬのよ』それが阿母さんだつたのかい……』はア』春さんは確に見たの……』見ましたとも、後影がスウーと廊下へ出るところを確に見ましたわ、眞個に氣味が悪いやうぢやありませんか』

『この節妙な感じが起つて來たのよ、此間あの白川さんね、貴郎も知つて居らつしやる泰子さんと會たときにね、泰子さんが大層憤慨してゐなさるから、何をそんなに不平で在つしやるのと聞いてみると、矢つ張り御同様に姑問題で……家の阿母さんに酷似てゐらつしやるの、私つくづく感じたわ、昔から嫁と姑は犬と猿だなんつて云てるのも、實に眞理を穿つた俚諺だと思つて……ねえ貴郎、私た

ちが年寄たら若い女に對して、今の阿母さんのやうな氣になるでせうか、是れからの疑問ですよ。『そりや、舊思想の泌み込んである老人と、新思想の喚發してある現代の女性とはてんであたまから異つてゐるから、今日の老人が若い女に對する思想とは全然違ふだらうよ。それに舊思想で養成された今の老人、即ち阿母さん位の年配の人なら多少の相違はあつても、同一思想の下に年を重ね來つたのであるから、それが何處までも好と信じてゐるのだよ、處で今の人時は時世の推移と共に高等の教育を受け、男も女も殆ど専門でない限りは同一の教育の下に知識を研ぎ、社會に立つたのであるから、男子が女子を見ること又昔日の如く木偶視はしない、相當の敬意を拂つて遇

するに至つたのだ。女子とても亦た男子に對して奴隷視されては居ない、況んや同性に對するに於いてをやでせう。『さうなのよ、確にそれに違ひなくつてよ、如何に長上の人だからつて、自己の權利を蹂躪されるやうな事があつては黙つてゐられないわね、昔の女のやうな卑屈極まる態度で、姑の無理をてんから甘受して涙を呑んでるなんてえやうな愚な事は出來ないのさ、だから新舊思想の衝突から餘計不愉快な點が双方に起るのでせうね……泰子さんも左様いつて居てよ、私だつて年を取つてゐなざる阿母さんだから、何も逆らひたくは無いら、圓滿な家庭を造りたいと心懸け我慢の出來るだけはしますが、お前は立派な教育をうけてヤレ米國が何うだの佛國が

斯うだのと云ひなさるが、日本人は日本の習慣があります、女だて等に交際だとか云つて家の事は構ひつけず勝手に飛歩いてゐて、家の取締がつかましますか、だから女學生あがりは口ばかり達者で、御飯一つ満足に焚けないぢやないかつて、面當向つてツケ／＼仰やるぢやアありませんか、ねえ貴郎、私だつて御飯ぐらひ焚かうと思へば焚けなくてはなかつてよ、餘り皮肉だからツヒ一つや二つは答辯もする氣になつて、御機嫌を損ねるやうな結果を來たすのよ、何うしてまア彼様なのでせう『……………』『泰子さんも左様云つてゐなさつたわ、姑の僻根性には困るつて、何かといふと直ぐ年寄を邪魔にすると云て拗なさるさうですが、阿母さんも左様なのよ、私が聊か答

辯を試みて旗色が悪くなると、お前は學問は出来るし、口は達者ではあるし、とても昔者の年寄は口では適ひません、何うで最う先きのないものだから澤山お苛めなさいなんつて捨撥なことをお言なさるのなもの、私何うして好か眞個に泣きたく成ることが度々あるわ……………だから貴郎でも愛して下さらなかつた日には遣り切れたもので無くつてよ、此間のやうに貴郎にまで劔突を喰つたら死ぬより外に仕方がないのなもの……………』

あゝ何といふ事であらう、此のお嫁さんが姑に對する感情の告白は如何であらう、自ら省みるところ無くして自分の爲ることは飽くまでも善良である、少しも道德に背馳してゐないとの自信がある



敢て善惡の斷案を下さずとも、嫁の姑に對する義務、習慣に鑑み  
ないも得て斯かる屁理屈に歸着するのだ、是れでは亭主の鼻の下  
びること三千丈に至るを證明する、呵々。

### 女優といふもの

樂あれば苦あるもの、昔しから樂は苦の種、苦は樂の種とか云つ  
て、苦と樂とは互に相提繫してゐるものである。世間では大層樂さ  
うに見えて案外樂でないものが中々に多い、其内でも女優など云  
ふのも矢張その一つであるかも知れない、表面華美にケバ／＼しく  
暢氣さうに、舞臺で踊つたり跳ねたりして居るところを見ると、虚

榮心に呪はれた若い女は一番女優になつて、華美な生活をして社會  
からヤンヤと云れたい、お金などは何處からでも掴み取りにして、  
パツバと威勢が示したいと思ふのも無理からの望みを起すに至るの  
である。

あゝ女優は綺麗なものである、流行の魁になつてゐる、意氣揚  
揚とゴム輪の俵で樂屋入りをするは華美やかであるに違ひない、  
行燈袴をばいて電車の中でツルシンポに成つてゐるとはてんで比べ  
ものに成らない、一朝立女形となつて名聲を博すると幸福の頂  
點に達するのである、あゝ女として社會に立つには女優たるべしだ  
などゝ、飛んでもない考へを新しがる女には有つものがある、女優

といつても一から拾まであつて一概には云れない、帝劇で兎も角相應に役もつき虚榮の競争をするのも女優である、場末の寄席や田舎廻りをして小屋掛の蓆張でギチバタ遣るのも同じ女優である、また泰西の一週間何千弗といふ報酬を貰つて、勳章を輝かし飛ぶ鳥を落してゐるのも亦女優である、然れど現代の人の頭腦へピンと來る女優といふ語は、昔のオデッコ芝居の女優や源氏節の阿婆摺どもを云ふのではない、兎に角帝劇やその他の新しい女どもの虚榮に憧憬てゐる女優を意味されてゐるのだ。

女優は技藝は未熟でも容貌が一寸と濫皮が剥けて、華やかで綺麗であるのと、内證の魂膽は何うあらうと云、立派な衣裳を着け流行

に後れないやうに、持物その他で飾り立て、目につき易きやうに扮り、愛嬌があつて自他平等に笑みを以て迎へ、假令や厭な者にも柳に風で渡れば憎まるゝ事なく、此の三つの中に特徴を備へて、それを遺憾なく發揮してさへるれば、天下に名を知られ、眞負を得られるのである。この點に於いては男優とは違つて餘程樂である。一面には斯うした樂なところがある代り又相當なる苦も伴ふてゐるは、如何に女日照のするからつて夫れでは餘り牡丹餅の頬擦だ。世間の人氣を集めると云ふに就ては、第一金が要る、女優で候と濟しこんで居て、源氏節の女優者のやうに垢ベタくの着物に、扱きの帯でイミ割れさうな大道白をさらけ出して居たのでは、てんでお座が

醒めて折角目を細くして寄つて来た浮氣男も、お去らば去らばと逃げ支度をする事になつてしまふ、だから何時も最新流行の華美な扮装を衒ひ、流行の魁は此方でございつてえやうな面つきで居なければならぬのである。さあ之れを爲るのに其の金が何處から出るか彼等の技藝によつて得るところの身上、即ちお給金なるものは何うであるか、此の贅澤、この資格を保つだけの収入が果してあるか、これ問題とするまでも無く、到底不可能のことであるから、どうしたつて金を他より求める道を講せねばならないのである。

女優として生きて行くには、舞臺で踊つたり跳ねたりして黄色い聲を出して居るばかりでは、體面を保つことが出来ない、得るところ

ろの金よりも出るところの金が數倍になるので、眞面目で世渡りをするには反對に貧乏世帯の遺縁より餘程辛いのだ。その入り道が只だ身のまはりの裝飾に要るのみでない、舞臺上に立つても何時も何時も「入らせられませう」では技藝はあつても面が善くつても、好い役が振られなかつたら團栗の丈くらべで喝采を博することは難い素より女優に成らうと云ふ現代の若い女で、果して眞に藝術を愛して女優たらんとする者があるであらうか、立女形となつて天下に其の名を轟かせやうと云ふ信念のある者があらうか、是れ等はまあ覺束ない話であるにしても、舞臺の上に於いて相當の役を振られなかつたらつまり其の名も知られないで了るのだから、座頭とか舞

臺監督とか云ふやうな自分の活殺を握る側へは、いつも御機嫌伺ひを遣らなければならぬ、それを怠るといつ迄も端役ばかりを振られて發展の道が塞がれる、況して逆鱗に觸れたとなると惨めなもので、何時までも『入らせられませう……申し上げます』で認められることは無いものだ。世に認められて多少何の何子と知られるには、そこがそれ黄金の力であつて、技藝は何の役にも立たぬ、美しい顔の輪廓は用を爲さないから哀れなもの、白粉を塗つたり落したり表向きキヤツ／＼とハシギ切つて面白さうに見えても、存外内幕に入ると氣の毒なところがある。で、自分の家に資産があつて父兄がドシ／＼貢いでくれるなら、自ら金の工面に濫面するにも及ばす

ノホ、ンのホンで通れるのだが、普通女優たるを許す家庭としてみると素封家とか、紳商とか云ふものは先づないとせなければならぬ。つまり女優で生存せんとする以上は泣いても笑つても、金といふ敵が尤も必要になつて来る。其様苦しい目をしてても女優で立とうとする心が解らないやうであるが、結局虚榮の權化ともいふべき中毒症に罹つてゐるので、美しく装ひや綺麗に着飾つたり、間がよくば自働車にでも乗せられて、ブツ／＼ブツ／＼の蠻聲に往來の人々を吃驚させたり、電車と危く衝突せんとして可憐な玉を挫がしたりそんな高い税金の支拂ひをしてまでもやつて居たいのはつまり虚榮からくるのである。

金といふ奴は天から降つても来ないし、地から湧いても来ない、舊劇なる梅ヶ枝が無間の鐘……柄杓で張ボテの手洗鉢を叩く真似をする、小判や額がバラ／＼バラ／＼と出るが、實地では中々そんな巧い譯には往かぬから、金銭上の保護者を撰定しなければならぬことになる。この保護者といふ奴が何れて目カ一の流れを汲むか、否らざれば純然たる獅子的人物でなければ、容易に無報酬の金をさアお使ひなさいと云つてはくれない、此のセチ辛い世に誰れが無報酬の金、シカモ纏つた金を投げ出すものか、女優に『操行を望む』といふのは無理な注文で、砂礫の中から金剛石を拾ひ出さうとするに同じことだ、既に女優に成つた時からして既に操は金の代償と覺

悟すべきだと或人は云つてゐる位だ。

現代の女優氣質といへばまづ斯うしたもので、多くは一般にいふ旦那ともつかず、又情夫ともつかず、一人一人の男子より貢ぎを受ける爲めに、それと遊樂を共にして只だフワリ／＼とするのが數多ある、名は暫らく隠して置くが或る洋行までした女優とか、洋行をせんとする女優とか云ふ女は、家は堂々たるもので父は娑婆ツ氣の強い男であるから、女優並のことをせずとも好さうであるに、ヤレ某と自働車の合乗で鶴見に往つた、ソレくれがしと手を携へて東京驛から一等列車で大森へ降りたとか中々口が煩い、ハテ扱て如何に金と女は浮世の敵でも、相見互ひの敵同士で敵の同士打ちする

も亦た面白く、人間萬事金の世の中ぢや、金の世の中ぢやが緑色の窓掛に隠れて情話を生み、それが又女優氣質をヒリ出して來るのである。

成り上りの細君

『彼れは成り上りだ、元を忘れ横柄な面附をして居たつて誰れが細君扱ひするものか』などと、常に輕侮な眼で睨まれて、出入の商人でも面當向へば奥さんとも云ひ、また御新造さんとも敬意を表するが横を向くと赤い舌をベロリと出して、先代菊五郎の聲色でも使ふやうに願を突き出し、イ、ーと變な眞似をされる細君が、世間には隨

分あるものである。

成り上りにも種類があつて、夫婦共稼ぎで切々と貨殖の通を講じ貧乏人の足を洗つて福々長者となつてゐるも成り上りである、主人の幸運に附隨いて奥さん然と構へるも成り上りである、また奉公人として住み込み主人に持掛けて、マンマと首尾よく反逆の成就したも成り上りであるが、第一の如きは親しく辛酸を嘗め盡し、風浪に弄そばれ雨雪に困しんだ結果であるから、世間も其の耐忍に感奮し努力に敬服して居る、それが其の人を尊崇する媒介となつて、輕侮の念は更に起らないものだが、第二第三となると大いに異なる點がある、寧ろ濡手で粟を掴んだに同じことで、自分は何等の報酬を拂

つてゐない、糟糠の妻らしい顔してヌット奥さん風を吹かすか、持合せものを餌に宜しく籠絡して乗込んだ御新造さんである。

成金を亭主に有つたお内儀さんが、急にお裝飾をしたつて、一人者と一人者が意氣投合して女房に成つたつて、何も岡焼半分の嫉妬を擔ぎ出すにも及ばない筈である。皆個人の自由意志の發展で他人の制肘すべき範圍でないが、兎角こんなものになると何ういふものか威張りたがる、今まではビイ／＼風車であたのが、急に懷中が暖かになると是れ見えてくれと、外見を張つて自ら豪がらうとする、又は昨日までお鬘どんの飯焚のと軽々視されてゐたものが、俄に火鉢の前にくの字形にブツ座つて、八百屋や肴屋を呼び捨てに家庭の女王

だよと、大面かわいて見たい所から、ムラ／＼と世間さまのお氣に障つて来る、生意氣だ、横柄だ、成り上り者は仕方がないと言囃されるのだ。さア斯うなると僻みといふ奴が起つて来る、反抗心が出て来る目下のもつまり一階級下にある者に對して、今まで忍んで来た屈辱を取り返さうとしてくる、何うかして成り上りものと見られたくない、元はお鬘どん奉公した者と思はれたくない、女には特に有り勝の名譽心、虚榮心に駈られてお先眞暗で自ら反省することが出来なくなるのだ。

斯うなると最う一種の病的だ、只だ自分を豪がらせたい、一般から奥さんと尊敬されたいと云ふ念が充満してゐる、と云つて金ピラ

を切る様な體裁の態ことはやらない。つまりこゝらが成上りもの、身上かも知らぬが、世に云ふ三碧の女が買喰すると、たとひ一文菓子でも價切らねば損だといふので客齋の骨頂を示してくる、奉公人が『肴屋がまゐりましたが……』と云ふと、自ら臺所へ出張して買物をする、奉公人任せにして置く萬事に冗が出る、腹の痛まな買物高いも安いも其様事には關係がない、此の經驗は自ら甜めて來てゐる、主人の買物に出れば随分棒先を切る、足駄をはくなどは奉公人のホマチとして實行した覺えがある、我が物になると中々そうはさせない積りで五厘のことでも目に角たて、争ふ、一家の經濟を掌どるからは用意の周到は然ることながら、肴屋の盤臺に手をつ

けて『これは何……』『へい、そりや鯛でさア、お總菜にはお格好ですせ……』『一切いくら……』『八錢づゝにお負け申して置ませう』『お、高い、こんな薄ッべらな紙見たいな切り方でかい』『薄ッべらだつて、是れで中々儲かりやしません、元價になればそれで骨頭だけの足代になるんですせ』『巧く言つてるよ一切七錢五厘にしてお置きな、それでも折れには儲かつてるんだから』『串戯ちやアありません、七錢五厘なんか負かるもんですか、八錢でも大負けなんですそんな事を言ずにおくんなせへ』『それちやア仕方がない、一切七錢のお切り……』『七錢には切りやうが無いですよ』『何少々カマの處でもいゝから……』『さア三切で廿錢……廿錢のお釣錢をお出しな



さい……梅やお……打つてお出で……」と云ふやうな買振である。それが特り魚屋に限つた譯ぢやない、八百屋でも酒屋でも皆この筆法によつて遣られるから助からない。

全體成り上り者に僻みといふ奴は兎れないもので、他人が自分を成り上りだと輕蔑して居やあしないか、何うか左様見られないやうに仕度と云ふ、女の少量な心から餘計なことを氣にする、自分が外出すると近所の眼がうるさい何でも自分の周圍には小姑が多い、餘計な監視者が何處にも此處にも居るのだと、青い目鏡を掛けて世間を視るものだから、只だ僻見の一方にのみ凝り塊るのだ。斯うなると出入の商人どもまでが何となく自分を馬鹿にして、高い物を賣り

附けやうとするし、お饗どんまでが返事はして居ても急に腰を切らないのは、つまり主人を主人とも思はないからである、彼奴も妾を見くびつて居あがるから尻が重いのだと、僻見はますます僻見に沈んでくる、さあそうなると下風に立つものは居辛くなる、奉公人などには自分が嘗て頭上よと浴びせられた復讐をする、意志はさうで無いまでが夫れの如くに側より感情を惹起すやうな舉動となる。一面から云たら臺所の監督が能く届くと云れるかも知れないが、餘りに重箱の隅を楊枝で穿くる體の處置に出で、お饗どんが澤庵の尻尾を摘んだまで口喧しく罵るものだ。百人が百人必ずそれとは云ないが、一つ鑄型に容れて打ち出したので無いから、各々行き方に

違つた點はある。又性質のこそしくした者と、大サツバのとの區別はあるけれど、得て成り上りの奥さんと云ふと下情に通曉してゐるのが多い、自らその衝に當つて追ひ廻されたのもあるので、却て同情をして勞るべき筈であるのに中々そうではない『お梅や、何をしてゐるのだねえ、瓦斯をこんなになつて使つては堪りませんよ、お釜を下したら消しておいたら好ぢやないか……ポツポツ／＼冗に燃しておいてお芋の皮なんか剝いてる奴がありますか、一度つかへば幾干つゝかメートルが動いて、瓦斯代を取られるのですよ、眞個に氣の利かないにも程のあつたものだわ、それで他人の御飯を喰べて行かれる氣かい……』と口を衝いて罵倒される、如何に其の身に不

行届の所があつても、扱き卸されて好心地のする者はない筈だ、お焚どん先生にも五分の魂はある、プツと脹れた其の夜になると、『一寸と宿までお暇を願ひます……』と體よく尻に帆を掛けるのもある、此方も又かと度々喰ひつけると容易に外出を許さないと、何時か無断で逃亡かつて了ひ、桂庵が仲裁やらお詫やらで荷物を引き取りに行くといふのが、二月に一度か三月に一度づゝ必ずあつて果ては桂庵の方で警戒するに至るものもある。要するに成り上りの奥さんのある家に奉公人の居付ぬは、つまり使ひ方の荒いとか、總てに小喧しいとか、ケチン坊とか、僻みとか、嫉みとか云ふやうな責道具が揃つて居て、いやアに捻くれた成り上り氣質の根性がする業

くれである。

### 繼母のわけ隔て

繼母と云ふといつても繼兒苛めと云ふことが聯想されてくる。實際に於いて繼母が繼兒に對する感情が、甚だ皮肉なのがが多いのだから自然繼兒がその感化を受けてきて捻くれ者となつて了ひ、温かひ親の情愛を知らぬので、つい他人から少しでも優しい言葉を懸けられると、夫れが無性に嬉しく感じてきて其の人を慕ふやうな氣になるのである。ところで繼母だからつて皆んな繼兒苛めをするとは極つてゐない。中には我が兒よりも義理ある繼兒の方を愛し、人からみ

て自他の區別を些ともしない賢婦人も中にはちよいとあるが、それは全く雨夜の星で、容易に探し求めるのが困難である。可もなく不可もなく互に角つき合こともなくて、家庭の圓滿を装ふてゐられる程なのは上乘の間であつて、明けても暮れても睨み合つてばかり繼母は小供の強情を叱りちらし、繼兒の方はまた母の非道を數へたて、兩方共鎗を削る様なのに至つては全く以て御座がさめる。それでも少年時代では然ういふ抵抗も出来ない、辛い悲しい目を忍んで繼母の手に育てられるものもあるが、餘程公平無私な婦人でないと、先妻の子と我が生んだ子との區別を立てないで、一視同仁の態度で愛育することは困難と見えるものだ。繼母でも繼兒に對し

て世間體だけは至極同情のありさうにも見えるのはある『彼の兒も可哀さうでございますよ、生みの親だつたら斯うもしたい彼あもしたいと思ひますが、悲しいことには親といふ名ばかりで、爲めに成るやうにと思ふこともヤレ繼母だから酷い目に逢すとか、ソレ變つてゐるから構つて遣らないとか言れるには、ホド／＼氣が盡きて了ひますよ、心ではちつとも分け隔てなんかする氣は微塵もありませんが、世間の手前後妻といふ悲しさにまるで世間の人から監視でも受けてるやうで、まア／＼と悪い事をして大した害にならないことは、見ない振して横向て了はねばなりません』と云ふやうな愚痴が出る、一應至極尤にも聞える、けれども世間でいふ大多數の繼

母氣質と云ふと、世に定評があつて今更事珍らしさうに言なくも好いのだが、繼兒と實子とを分け隔てすることだとか、陰事をするとかが、尤も其の間を分離せしむる道行きと成るのである。

假りに兄妹三人あるとして、惣領の甚六は先妻の遺兒で、二男の次郎とその妹おみつとが後妻の出であるとする、そうして此の三兒の母として立てらるゝ者が、實子に對する愛はさも泉の湧くごとく滾々として盡きる時がない、口には煩いと一喝することがあつても憎惡の念は微塵もないのだから附纏はる小供等にも、何等の惡感情を與へるものではない、だから直ぐ叱られた跡より甘へるが、同じやうに阿母さん／＼と慕ひ寄る繼兒に對すると、其の言葉は少しも

慳貪でなく其の舉動は冷酷でないとしても、之れを懲らしたり之れを叱つたりするに精神的の愛情がないのだから、一縮みに縮みあがりその小さい果敢ない胸には絶えず怨惡の念を生ずる様になるのは普通で、戦々競々、たゞその顔色のみを窺つてちつとも伸やかな心といふものは無くなる、これが嵩じると世に云ふ繼兒根性なるものを養成する様になる。つまり母子の間に墻壁が築かれてお互に義理一遍の冷かな、温情のない他人行儀に流れるのである。小供は白糸の如しと云ふから染料の如何に由つては、赤くも青くもまた黒くも成るもので、性質の捻くれるのも柔順になるのも、小供の時代は全く他の感化に誘はるゝものである。乳母を傭つて育てさせても實母

に對する愛情が薄らぐと云ふ程で、一般の繼母式温情のない冷かな鞠育を受けたんでは、まあ〜人間一匹を拗者にする様なものである。

多少の義理を解し繼兒であるからと云て、殊更に虐待すると云ふ側でなくても、何となく寂しい冷たい心の漲りが絶えないものである。處が盛んに分け隔てをする婦人になると、苟且にも母と呼れる身の責めを負ねばならぬから、父親の面前では甚六も弟の次郎や妹のおみつと同じやうに、お菓子を買ふて甘さうに喰べる事があるけれど、父親は多く家に居ないのが常である。不在中になると『次郎さんとみつちゃん、一寸とお出で……』と遊んでゐるのを手招きし

てそば近く呼び寄せ、こつそりお菓子なんかをやらうとする、處で小供は無邪氣なもので『兄さんく』と次郎が何氣なく呼うとする、此處がつまり繼母根性で實子にはどこまでも厚く、繼兒となると辛くあたり可惜人間をとうく拗者にする處で『何で兄さんと呼ぶんだね……此の子は眞個に解らないよ、兄さん何か呼ぶのぢやありません、お前たち二人で黙つて喰べりや好のだ……』と甚六に與へるのを好まない。甚六として小供である、偶には菓子も欲しくなるから、遊んでゐても他のものが買喰するのを見て指を啣へ恙むこともある、また急にお菓子をネダルこともある、弟や妹が物を喰べてゐるのを見て自分も求めることもある、こんな時に快よくやつたら

よささうだが、中々そうはしない、與へるにしても世間體を兼ねて與へるのであつて、眞實繼兒に同情して與へるのでないから、小供ながら面白く思はない、嬉しいなにか思ふころは微塵もない。そうだから貰うものと繼母の顔とを見競べるやうに成る。斯うなるから繼母の方でも面白い感じはしない『何だね、此の子は……否やに妾の顔を見てさ、それで不足ならお廢なさい』と一喝する、叱かられると最うオツ／＼して逃げ出すから、繼母はますます其の態度が小癩に障り『眞個にあんな否やな子はないよ、幾個可愛がつて遣らうと思つたつて、あの仕打をされたんでは優しくもされないわ、父親が歸ると側へばかり嚙り付いて離れつこはなし、間に何か妾が

無理非道なことでもしてやるやうに……チロリ／＼妾の顔を眺めて、あの小間シヤクレ方では何と告口をしてるか知れたものでない……ほんとに顔を見るのもゾットする』とさも憎らしげにいひ出すものだ。

つまり憎い／＼と云ふ感情が重なつて來ると、其の繼兒のすること爲すことが何でも氣に入らない。親父がゐる時は流石にガミ／＼も叱らない、撲たり殴いたりはしないがウヂ／＼する手の遣り處に困り、實子に入つ當りで劍突くれる、マゴ／＼して居ると横反方へコッソお見舞一つ喰はされる、是れが即ち當つけである。實子は何うでも折檻するを繼しい中の子は私しが手を下せないから、お前さ

んが折檻なさいと云ふ謎である。鼻の下の長い女房に巻かれてゐる宿六なんかは、不在中のことを繼母から告げるので子を責める、娼ア天下の家に育てられた繼兒ほど世の中に惨めなものはない『甚坊や……』と呼ぶ聲は優しく女らしいが『甚六！甚六！』と辰巳あがつた疍走つた聲になつてくると、最う何事の頭上に落らかると合點して、哀れな小供はもう氣を吞まれてウヂ／＼して容易に返事もしない、返事もしないから怒りは一層強い『やい、この餓鬼は、妾を馬鹿にしやがつて云ふ事を一度でハイと聞いた例がないよ、今からそんなことでは行先きが案じられる……此様のが親殺しをするのだよ……次郎さんもおみつちやんも此方へおいで、兄さんは阿母さ

んを馬鹿にしてるからね、阿母さんは最うく構ひません……」な  
ど、云ふやうな情愛のない語を吐くものだ。大抵世間の繼母氣質は  
まづ是うである、いくら虚心平氣でゐたつて繼兒と實子とは自から  
其間に懸隔があるもので、ましてこんな筆法で小供に對するのだか  
ら、成育した後で繼母との衝突の斷える間がない。噫、此の繼母氣  
質。

素ツ堅氣の娘さん

悪風潮の漲つてゐる都會、新時代に生きやうとする若い女で、ハ  
イカラに感染しないものはまづなからう。如何に舊思想で捏らあげ

た家庭でも、娘を學校に通學させぬものはない、義務教育を緩慢に  
附し去る親は無いから、今時黒縞子の半襟の掛つた着物を着て、派  
出な模様の前掛をして意氣な扮装をしてゐるものは無い、ポツト出の  
お鬘どん、飯焚奉公に甘んじてゐる田舎ものでも綿紡績の襟なしを着  
てゐる、贅澤カブレのした我儘ものゝ多くなつた社會で、素ツ堅氣  
の娘、全く潮流に觸れない變屈女はあるべき筈はない、内氣な陰鬱  
な世間知らずの函入娘なんかは、鉦と太鼓で探して歩いたつてなか  
く容易に見出されるものではない。大抵は大正式に發展して都會  
の悪風に染み渡つて居るのが多い。

所謂令嬢なるものと階級の相違に依て、虚榮の程度に甲乙がある



に過ぎない、下町の商人氣質で家憲を守つて崩さず、または職人の親方、稽古所の師匠など、云ふ側になつてみると、世の推移と共に變遷はして居ても大分趣きが異つてゐる。是れ等舊式江戸時代の舊套によつて育てられた娘なんかには、まだ素ツ堅氣で意氣といふ江戸女の遺風を存して、ハネ返りのハイがつたのとは遙か女らしい處がある。此の種の娘さんでも十年前と今日とは餘程違つて來た、世の推移といふものは習慣風俗にも及ぶし、また娘氣質にも著しい變遷を來してゐる。

都に住む女で演劇を好かないものは殆どあるまい、見るは放樂見らるゝは因果とやら、凡そ見るものゝ内でお芝居といふと、三度の

御飯を二度と減らしてもと云ふ熱心家が多い。階級と生活の程度に由つて觀劇の仕方が異なるけれど、兎に角劇場に入つた以上、棧敷や土間で贅澤を盡して觀るのも、大入場の割込みに未見の人と膝を揃合て觀るのも、押すなくで他人の肩に手を掛け伸び上つて立見をするのも、場所に因つて演劇その物に區別はないのだから、觀ると云ふ上には少しも變りはないのである。で、各階級を通じて女性とお芝居とは、正覺坊にお酒金魚に子子と同じ嗜好物で、中世淫靡の悪風俗に魅せられた時など、紅粉に面を彩つて綾羅に姿を飾り俳優に心を寄せ、窃かに之れに憧憬れた者もあつたが、現代の若い女には俳優は男地獄だ、金さへ掴ませりや何でもない合點するものが

多い。之れだから平氣で最負にする役者の名を臆面もなく人前で嘸し立てる。十年前では若い娘殊に下町なんかに育つて芝居に親しみの深い家庭にある者になると、俳優の紋のある簪を得ると、之れを唯一のものとして大切にする、従つて手拭などを手に入るゝなどは大したことで虎の子の如く、朋友にも見せびらかして喜び騒いだ程である。況んや其の紋所を崩した模様のある浴衣だとか、または半襟などの我が肌に着く物なら、金銭に替がたき寶物の如く取扱つたものである。その状がまるで色情狂に髣髴たる譯であつたが、流石に今は然る馬鹿／＼しき眞似をする者はない。下町に住んで堅氣で通す娘さんたちとか、女學生カブレのしない新しい側から云ふと

時代後れのした娘さん連は今でもお芝居を三度の飯より好み落語家の謂ゆる喜いちやん美いちやんに屬する娘、三人寄れば姦しいで第一に出るのはお芝居嘸「喜いちやんは入らして……」まだなのよ……歌舞伎は好いッてね、福助がさ……「さうだとね、妾し橋屋よ」眞個に貴女は羽左さんが好きなのね、それに高島屋も松島屋も成駒屋も出るんだとね「お芝居はいつ見ても好いのねえ」と云ふやうな話が交換される。是れ等は云ふまでも無く多年の習慣性から來た家庭上の關係が現れる印象に外ならない。従つて茶の湯とか活花などよりも、淨瑠璃のお稽古に三絃の雨垂弾きを遣るやうになる。丁度一方の新時代の娘が學校の卒業證書を嫁入道具と爲るのに對して

之れはまた長唄のお許しとか常盤津または清元のお許しなどを取つたのを、賣物に飾る花と誇るのである。

また裁縫などにも注意を拂つて、お針の稽古も無論させてある。お稽古朋友とは毎日顔を合せて近所に居るものは互に誘ひあつて、往來に左もなきことを笑ひ興ずるのが若い女の恒であるが、イザ極つて何事にか遭遇する場合には、さア大變『美いちやん、貴嬢も入らッしやるでせうね』はア、喜いちやんは……『妾も貴嬢が入らッしやるなら往つてよ』入らつしやいよ、屹度入らッしやい……好くつて……『大丈夫よ、貴嬢、髪は何に結つてらつしやるの……』

『貴女は……』妾、島田が好いと思つてるのよ、だけれど髪結さんが

が上手でないから、阿母さんは矢張り桃割れにしたら好からうつて言てるのよ』島田にお仕なさいよ』でもね、彼の髪結さんに結すと借物をしたやうで笑止いんだもの……『妾の髪結さんは上手よ、島田なら何様始めてのお方でも屹度顔に似合やうに結つて自慢してるのさ』左様……困ツちまアねえ』妾の髪結さんに結つてお貰ひなさいな、明日の朝來るから、お迎ひに上げるわ、貴嬢が島田に結ないのに妾ばかり結つてはお交際がないやうで、何だか氣が濟ないからね』なアに構はしなくつてよ』だつて何だか……『好いは、矢つ張り高鬘が品が好いのねえ、簪もソラ白牡丹でお對に買った平打を挿さうちやありませんか、左様極めませうよ』それぢや貴嬢から頼ん

で頂戴……『はア好くツてよ、お召物は何になさるの……』『矢ッ張りお召が好いだらうと思つてるのよ、貴嬢何……』『妾も迷つてるの……貴嬢がお召になさるなら妾もそうと極めるわ、ソラ今年の春着て居た瑠璃縹の早蕨模様のあるのね、あれより無くつてよ』『あら、否だ、澤山ある癖に……ちやア妾も縹色にしてよ、扇散しの模様のあるのを着てゐたでせう』『左様く、眞個にあの柄は意氣な柄だわねえ、長襦袢は例のを着てゐらつしやいよ』『あゝ好いわ、おみ帯は何うなさるの……』『貴嬢も糸錦を締ていらつしやいよ、妾もあの金通しを締ていくからね』『お羽織は紫紺のやうなのをね、妾もお對な色だから……』『左様しませうよねえ』と極るにも中々手数の掛る

次第である。

斯ういふ處に娘氣質の無邪氣さがありくと表白されて至極初々しいが、如何に堅氣な女であつても、見得を張り外見を喜ぶのは女の通有な性格であるのだから致方がない、常に同等の權力を以て同等の地歩を占めてゐる彼等は、一朝何等かの晴の場所に於いて、自己の服裝が一方より劣つてはといふ杞憂から來るので、要するに自己本位に過ぎないのである。自己を擁護する爲めの友誼であつて、其の朋友が自己以上の生活する者、自己の比肩すべからざる階級者であつたなら、斯ういふ妥協や接衝は開始されないのである。つまり言を換ていふと矢張り虚榮心の流露で、骨肉の如く親愛する様な

朋友の間柄でも、一種云ふに云はれない反抗心があるもので、自己を守りつゝある處が最も面白く感じられる。

### 眞面目な妾

貞操は女の寶冠で、この寶冠を戴いて居るからこそ其の價値があるのである。女から貞操即ちこの寶冠を取り除いたら、如何な美人で嬌婉であつても、女としての價値は零なのである。女として最も大切なその貞操を自ら放棄して他の蹂躪に任せ、恬として耻ないのみでなく、却つて得々として世に誇る様な度し難い厄介者がある。そうして是れ等の女が白痴瘋癲者流ではなく、随分相當の教育も受

けてゐれば常識もある、應接をさせても裁縫をさせても、又遊藝をさせても女一人前の事は立派にして退けるのに、こんな才色素養を持ちながら貞操を賣物にして金に代へ、可惜女一人を捨りものに我れからする愚人がこの世の中に幾萬人あるとは歎はしい次第である。妾といふ語は極めて簡單であるけれど、其の爲しつゝある階級、手段、方法、生活、常態等を細別してみたら、ザット數へても十幾種類となるであらう。自己の貞操などはてんで眼中になく、只だ樂をしてお蠶ぐるみでノラ〜と暮したいと云ふ、一種の惰怠者根性から眼先の僥倖を覗ふものや、他人の誘惑に陥つて一時の虚榮に眼がくらみ、前後の思慮もなく貞操を賣るものや、又その身は墮落を

欲しないが四圍の事情に止むなくされて、奈落の淵に沈む憐れなものなど、多くは此の三者の外に出で、人の妾となつて、一身を廢物にして操行を顧みず、紅粉を弄して媚を售り、肉を殺ぎ血を啜られて餓虎の餌食となる者あらむ。ア、妾よ、妾よ、汝ほど世に不惑なものはあるまい、紅顔乍ち衰へて縮緬皺の波を額にたへ、漸く白粉焼けの目につくやうになつてくると、昨日の寵はもう衰へてカネに恨みの數々を愚痴るとも、誰れが馬骨を拾ひくるものあらんやである。空しく嘆けばとて今更追附くものではない。遂には生涯を日蔭者で終り死ねば赤ン坊と一所に、賽の河原で石を積ねばならぬのである。

柵の面取の格子戸作り、船板塀に見越の松といふ意氣な一構とは昔の小本にもある妾宅の形容ではあるが、現代のお妾さんで斯うした家に住ひ、小間使兼お鬘どんともいふ小女と猫一疋、めて動物三疋で氣樂に暮す罰當りのあるや無きや、そんな鑿くり立てはしてゐる暇もないから、活動式の一足飛びに現代妾氣質は何うであらうか懐中へ飛び込んで見るとざつとかうである。彼れ等とて矢張血の通つてゐる人間である、日蔭もので生涯を玩弄物になつて送りたくはないのは勿論である。假令味噌漉さげても割鍋にとち蓋の亭主を持ち、何の某の妻で候とチャンと戸籍面に登記して、大手を振つて社會を横行したいと口では云ふ、心の底でも左様思ふことは無き

にしもあらずであらうが、惰怠癖のついた自墮落三昧に、月日を送つて行くほどだから樂だと思ふと強ちそうでもないらしい。幸ひに亭主が働きのもので、お心好で、嬬孝行であつたなら好いが、なかなか左様はお誂へ向ばかりの亭主は容易に得られるものではない。働きのものならそうく女房に鼻毛ばかり讀れては居ない。最う一年一年と年を取り幸に小供でも出来て、これが鎧になつて一生を安樂に暮すのもあるが、先づ普通のお妾では色が衰へるが寵の衰へでお拂ひ函となるとき手切れ金でも貰へば上々であるけれど、兎角妾といへば世間からの同情が乏しいから、いくら忠實に勤めてもクスネてゐるの、旦那をたらしして常にイザ鎌倉で尻に帆をかける支度を

してゐるのと、餘計なお節介口の多いものである。

鐵化者の酸でも蒟蒻でも始末にならぬ奴なら、臀の毛まで引っこ抜いて懷中を肥し、随分惡辣な所業に及ぶものもあるけれど、眞面目で妾奉公をする側になると、其様のはあまり多く無いもので、間がよくば旦那の家へ乗込んで後妻にでも成らうと云ふ位の野心である。是れ等が普通妾でもするものゝ覗ひ處で、世話さるゝ人その人を締めあげても、金さへ取ればそれで満足すると云ふ無情の女は少ない様である。女の性情から云つても其様思ひ切つた事を敢てする惡徒ならば大抵後援者があるとか隠し男があるとかで、其の誘りに乗つて心ならずも實行する者の外は多くない圖である。而して何ば

彼れ等だつても妾といふ名に決して甘んじて居るものは無い、妾と呼ばれるを嫌つて奥様なり御新造さんなりと云れんことを願つてゐる。下女なんかには無論「奥さん」と云してゐる、出入の酒屋、八百屋、肴屋なども奥さんといつたり御新造さんと呼ぶので、御機嫌斜めならずで天晴奥さんに成り済し、後背を向て舌を出されてゐるのにも氣が注かないで高いのを承知で買物もする位である。是れも人情の然らしむる處で、強ち借上の沙汰とのみ貶し散らすのも哀れである點もあるのだ、多くは空々寂々何の念慮もなくウカ／＼と其日／＼を安樂にブラついて後日の事などを思ふものなどは稀れである。

我が子に妾でもさせて暢氣であるものや、自分の虚榮心から好きこのんでノラクラ遣る女は、莫連者の阿婆すれで無ければ、一旦泥水に沈んで墮落の淵より這上ることの出来ぬ、捨鉢になつて眞面目な人世に立戻られない厄介者である。然もなくして眞面目で妾を世渡りの業とするには、何れ後背に熊鷹婆アの母親とか、醉漢の爺とか或ひは賭博で何時も危なく世の中をビク／＼する破落漢が、影身に沿ふて其の生血を搾り取つて、懷中手で口腹を満たさうとする浮浪の徒が窺つて居るのである。斯ういふ側になると實に慘めなもので一片の同情心などは薬にしたくたつて湧き起るものではない。だから妾それ自身も自然その境遇に何時とはなしに馴れて来て、權威を



振つて親を親とも思ふものなく、父と云つたり母と云つたりするの  
も世間の手前ばかりで、まるで厄介者なんかの如くに取扱つて反つ  
て悪口したり雑言も吐くのである。素より道徳だとか徳義だとか云  
ふ立場から見たら論外である、場合には人間視することは不可能で  
ある。

だから親子間に漲つてゐる温かい情は勿論なく、只だ自分の遊樂  
の爲めに金銭を貪り取る料に供するのみで、金を得る爲めに我が娘  
を主人の如く崇めもしたり、又ある時はその奴隷となつて畜生と罵  
られても、慾張りと罵られても少しも痛痒を感じない如く、只だ利、  
只だ慾に耽つて金を貪ることを唯一の目的とするのだから、もしそ

の旦那の身代が左り前にでもならうものなら、娘本人が如何に同情  
の心を有つてゐやうが、また情緒纏綿離るゝのを欲せないでもそん  
な事は構はない、たゞ之れを引き放すことに工夫を凝し、はや新規  
の金蔓を物色しにかゝる。餘程阿婆摺女でない限りは妾それ自身だ  
つて、常に蜒蜒の様に嫌つてゐる男なら知らぬこと、毎日起臥を共  
にしてゐるのだから、多少でも愛情の發するのは自然の結果である  
であるからまさか品物の様にさも破靴を捨てるやうに一昨日お出で  
と突出されるものではない。妾などをやる者の心情は皆薄情者の様  
に云ふが其れは大いな誤謬である。眞面目な妾はなかく親切もあ  
るし、思ひやりもある。然し著者に妾がある譯ではないから妾の最

負をする譯でもない。弱い女一人ではそう悪黨にはなれない。もし悪辣な所業をする奴であつたら、大抵背景に何か附いてるに違いない。

### 三十前後の寡婦

新潟の八百八寡婦とか云ふ俚諺がある。つまり是れは賣笑婦の代名詞となつてゐるのだが、由來寡婦さんなるものは若くても年配になつても、どうしても操行を全ふして高潔を保つことはなかく難いものである。日本の寡婦さんに就て嘗て緒方醫學博士が發表されたことがある。それは三十前後になつた婦人が寡婦になつた場合、

多く貞操を完ふすることが出来ない理由を述べてゐられる。其説では三十女が獨身であるのは生理上から不可能である。元來女の性慾生活は普通十四歳から四十九歳までを云ふので、破瓜期から月經閉塞期に達する迄の間で、丁度その真中ごろに當るのが三十歳前後である。つまり性慾熱の高潮してゐる時であるから三十前後の寡婦は、大抵この中毒状態に罹つて男の口車に乗り易く、遂に操を破るやうな結果を招くに至るものである。我が日本での三十前後の女に私生兒が一番多い現象も、つまりはその原因が此處に歸着するのである云々。

其れ等は素より學術研究から來た處であつて、大括した上からの

説明である。比較的三十女の寡婦さんに破操者が多いと云ふのであるが、則ち一般を代表した寡婦氣質となるのだ。しかし何ものにも表裏はある、寡婦さん氣質にも矢張り玄關附の口上と裏口ヘソツト廻つた世話に碎けた詞とは違ふもので、再縁を勧める者があつて、『失禮ながら、まだお若くていらっしやるに……最う一花お咲せになつては何うでございませう』と切り出すと、中には随分開き直つて『御心切は有難うござんすが、妾は心に黒染の法衣を纏ふて居ります、只だ最う亡き人の冥福を祈つて暮すのが、自分の望みでございませう』と口では立派に言てのけても、雨が蕭々と窓を打ち四邊間として聲なき時など、遙に犬の遠吠が、腸へ泌みるやうに聞える様

な晩、電燈の光の時々薄暗くなる時など寂しさが増してくる。さあそうなると、何となく心細くなる。女一人の家庭は何となく物淋しい、何となく怖い感じがしてくる。男手が慾しいそなたたら心強くなるであらうと千々に思ひは亂れてくるものである。

寡婦さんでも多少資産が有つたり、家族扶助料とか恩給年金でもあると、窃かにこれを覗ふ狼連中が機會を窺つてゐるので、何かの手蔓でも探し當ると得たり賢こしでノコノコサイノコ入り込んでくる。そうして極めて着實に極めて深切めかして籠絡にかゝる。此方は何となく物寂しく感じてゐるところだから、左様安ッぽくは應じるものではないが、段々と深切といふ責道具で弱點へ切込みく

来る、二度が三度、三度が四度と會見が重なるに従つて、談話も左様然らばではなく、そろ／＼打ち解けて来る、まだ失せやらぬ残んの色も香もある乳母櫻、幾人かの小供でもあれば有るだけに行末の案じられるのは女心、また小供が無ければ無いで尙更に前途の思はれる處から、ツヒ親しみ易くなつて自然と打明け話もする様になる。斯うなると待てゐました、此處まで漕ぎつけるには随分腦漿を搾つて馬鹿に成つたのだと、徐々奥の手を出しかけてチワリ／＼と攻め寄せて来る、そうになると何となく力となる様な氣になる、今まで白粉氣などは微塵もなくなつた者が、ホンノリ薄化粧もするやうに成るのは自然の状態であるのだ。

順序はまづ此様やうに運んで来るもの「奥さんも斯うしてお出でになつては萬事御不自由でせう、何うです、一人然るべきお話對手をお求めになつては……」と持ちかける、然し表を飾るは女性の癖で「中にはさう言て下さる方もありますが、三十面さげて再縁でもありますまいし、今まで後家を立通して來ましたから、ホ、ホ、」  
 「そりや、御尤ではございますが、左様堅くるしい事ばかり言ておいで成さらずとも好でせう、昔は貞婦兩夫に見えずなんてえ事もありませんでしたが、大正の今日ではチト流行後れでせうよ」さう云て見れば其様ものかも知れませんが、妾が斯うしてゐても亡なつた人が蘇生するでもありませんから、一人で困しんでゐるより御相談對手

がある、何様にまア心丈夫だか知れませぬわねえ』となる、急に旦那氣取りでヅル／＼べつたりに入り込むのが中々に多いのである。斯くして男の甘言に乗せられて其の資産は蕩盡され、扶助料や恩給ば高利貸の手に渡つて、貞操は蹂躪されて了ふしまるで赤裸々にされる。幸ひに其處まで悲惨の境遇に立たぬまでも、散々に喰ひ物にされ慰みものにされてから逃げられるのも中々にある。實に世の中は物騒至極で身から出た錆とは云ひながら、又同情の價値なしとも云へないのである。あゝ寡婦さん、別てこの三十前後の寡婦さんほど、危険で誘惑に陥り其一身を誤り易い時はない、多少身分のあるものでも尙且つ然りであるとすれば、意志の堅實でない寡婦さん

などは、一朝の墮落の爲めに奈落の底に沈み、濱町あたりの待合へこそ／＼と夜陰に潜づト込む様な事にも至るのである。

又自ら結婚媒介所へノコ／＼自身で嫁入口を探しに来る寡婦さんも随分ある想である。是れ等も一面には生存競争に疲れはて、獨立の生活に困難なる結果に外ならないのであるが、一面にはまた生理状態から餘儀なくされる様にも思はれる。つまり緒方醫學博士の説に裏書を與へてゐるやうなもので、生理状態の靈妙なる働きに悚然たらざるを得ずである。要するに三十前後に於ける寡婦さん氣質即ち墮落は、素より其の人の意志の健實でないのに因るとは云へど、生理作用も亦た與つて力あるものと斷言して憚らないのである。

## 遊人の女房

何を稼業とするでもなく、毎日ノラリクラリと暮らす様な浮浪の徒は随分世間には多くある。しかしそれ等のもでも表立て稼業はないが、素より金の茶釜が轉がつてゐて、片端より缺いて暢氣に喰てゐるのでない限り、中々危ない橋を渡つて法網の目を潜つて、おまけに寒中片肌脱きになつて啖呵を切ることもあるし、また懷中に怖ない九寸五分を呑んで、時には白刃の舞を演じて威勢を張ることもある。それが稼業だと聞いたら臆病者などはびつくり仰天して桑原くを叫ぶであらうが、見掛けよりは存外に義氣に富んでおまけ

に任侠の振舞があつて、顔を賣り男を研くのが唯一の目的で、男の中の男と云れたいのが望みである。損の徳のと云ふやうな小煩い勘定は捨て顧ないのが多い。斯様膽ツ玉の据つた所謂遊人などになると、何れ一方の首領株で親分とか頭とか一派から尊敬されて、その下には常に恩顧を受けて命がけて動く乾兒といふ奴が養はれてゐるのだが、同じ遊人でも鷺下奴の祿でもない破落漢などは全く以て社會の厄介者で、所謂人間の屑でもし御用の聲が掛つたら、何分かづ、國庫金を喰潰す玉である。

首領株である親分なるものゝ女房を彼等は姉御などと尊稱して、其の勢力をさくく亭主を凌ぐほど權威があるから、乾兒などは到底

頭が上がるもので無い。而してまた一種面白い姉御氣象がある。それは姉御の尊稱を受けるのにはまた夫れだけの資格が要る。千軍萬馬の中へ飛び込んでもビクともせぬ膽力が第一で、何處となく豪傑風の肌合が必要である。要するに男勝りで氣轉が利いて、物事に出席しても驚かぬと云ふ氣象でない、まづ姉御なる尊稱を保持することは難いのだ。

『おい、金太、何を茫然してるのだ、昨夜またカラツ尻に取られあがつたな……』へ、む、姉御、そんな弱い金太ぢやげせん、白銅一個懷中に無くなつたッて驚くやうな兄哥ぢやねえやな』巧く云てあがらア、昨日の朝は何うだ、姉御濟まないが湯錢を貸しておく

んなせへと、尾を振つて頼んだぢやないか、大きな口を利きあがると最う無心はきかねえよ』おつと、あれは……』あれは何うしたのだ、ざまを見る、直ぐその通りぢやねえか』そんな事は覺えてゐなくも好になア』馬鹿も休み〜云ひねえ、親分の耳にでも入つたらカスを喰ふぢやあねえか』こいつは内所の魂膽だが……姉御、豪へことが擡がつて始末に了へねえんですが』豪へことッて何だい何うで碌な眞似をしたんぢやあるまい』それが、出入ことなら親分に打明けて何うだつて埒の明け方があるんだが……此奴一番困つてるのでさア』何だね……男らしくない判然言て了はねえか、妾でなることなら何うとも相談に乗つてやらうぢやないかね』え、姉御

が相談に乗つてお呉んなさる、そいつは有難いや、何うも濟みませ  
 んが、何分宜しく御願げえ申しやす、あゝ是れでサバくした『自  
 分獨りで合點してゐてさ、妾に始末がつくか付ないか分りもしない  
 のに……』姉御がウンと言ておくんなさりやア大丈夫だから……』  
 『まだ文句ばかり並べてるのかねえ、サツサと用を言たら好ぢやな  
 いか』言ひますよ、實は姉御の前でげすがね、意外ことに成つちま  
 つたんで、私の始末にいけねえ』女でも拵へたてえのだらう』『お  
 手の筋……その意氣事……』馬鹿も休み〜言ひねえよ、手前が  
 密々遣つた粹事の尻拭ひを持込めてえ奴があるか、何だいその對手  
 は……素ッ堅氣な女なら罪だよ』それが彼の何です』何です分る

ものかね、自烈ッたい人だよ、お前に引つ掛る位の女だから、向ふ  
 裏のお鍋どんぢやねえかい』こりや驚いた、姉御そりや餘り可哀さ  
 うだ、實はね、横丁の米の阿魔でさア』お、米、一寸と愛嬌のある  
 娘だわねえ、此の節歸つてるのかい』え、先月の初めに逃亡かつ  
 て來あがつたんで……』おやまア、彼様顔をしてゐて油斷がならね  
 えよ、よくお前のやうな野郎にくつゝいたものだねえ』私だつて左  
 様見くびつたものでげえせんせ、地色の一人や二人……』自惚も好  
 加減にしろ……それが何うしたと云ふのだ』なアに、彼女とは今日  
 此頃の事ぢやねえのさ』柄にない生意氣を云ひなさんな、人が聞い  
 て呆れらアな』左様ガミ〜雷様に鳴られちやア話も出來ねえ』



『出来なけりやア廢すまでだよ、面白くもねえ、勝手な眞似をした尻拭ひは御免だからねえ』姉御、そんな事を言わないで後生だから助けておくんない、なに、それがね、阿魔も最う田舎くんだりへ賣り飛されるのが厭だつて、昨夜家を逃げ出しあがつたもんだから、私も仕方がねえんで偏目婆さんの所へ投り込んでおいたが、何時までも打捨つて置かれもしねえし、一罇をつけるには〇式が要るので手のこつぽを摺てるんでさア』何だい、最うそんなになつてるのかい、なんぼ女から頼まれたつて厄介な野郎だなア、それで何う仕様といふのさ』何うの斯うのてえ考へもねえんですが、阿魔の云ふには何様裏店へでも世帯を持ち、彼女は女工にでも何でも通つて夫婦

共稼きに堅氣で暮さうてえ譯で……』女も眞個にそんな氣であるのかね、お前欺されてるのぢやねえか』そんな事はねえよ、彼女は何時も私に堅氣になつて、縦んば大道店へ座つて三文商ひしても足を洗つてツね』左様かい、其様心立なら見上げたものだ、お前より何うやら確りして居さうだ、それに間違ひなくは一肌脱いでも上げやうよ』姉御、濟ねえが何うかお願い申しやす』

さて引受けたら最後、連添ふ亭主の顔はあるにしても、負じ氣象と俠氣が先棒となつて女ながらの長兵衛も極める、ある場合になると亭主の賣つた顔の權威で幅を利かすこともあるが、姉御と立てられ、乾兒の面倒を我から見やうと出しやばる程の勝氣者であるから

この社會に漾ふ一種の空氣に自然と同化して、善にもあれ惡にもあれ面白修養を積んでゐる、所謂姉御氣質なんてものは其の人の利鈍で厚薄があるに相違はないが、必ず日常の様子に仄めいて居るものである。

要するに同情心に富んで、他人の難局かなんかになると其身をなげ出して凡てに努力する氣風、即ち任侠の風ある江戸ツ子氣質で姉御と呼ばれて得々として快とする女にあるのだ。随分世間には『此の事は貴姉に限りませぬ、何うかお願ひ申します』と下手に組で來られると、女伊達等に娑婆ツ氣を出して、其の事が自分ならでは解決が附かないものゝやうに考へ、理が非でも一旦請負ふたことはド

ン詰まで押し通し、曲つてもくねつても埒を明けんと努力する人がある、男には勿論、女にもこの類が澤山とある、之れを稱して俗に姉御肌と云ふ、所謂任侠の小なるもので、變體的江戸ツ子の遺物であるといふを憚らないのだ。只だその美德とする處は謝禮を得る爲めにやるのでない、敢て自分の名聲をのみ博する爲めにやるのでも無い、一片の同情、氣の毒である、嘸ぞ困るであらうと云ふ清らかな精神から來るのが多い。煽動に乗せられて、働くのとは少し撰を異にしてゐるのが、姉御氣質の特徴である。只だ其の境遇が天真爛漫的であるだけ、龜野卑行なのは瑕瑾ではあるけれど、深く翫味するとその露骨な素朴な處にむしろ敬愛すべき點が閃めいてゐるので

ある。

### 美人がる女

醜しうといふことは誰たれも好このまぬが、それに反はん對たいの美びとなると咽のど喉どをコロ／＼鳴ならして喜よろこぶのが人にん情じやうである。總すべての上うへに於おいて美びは萬まん人にん好すきのするもので、況まして女をんなに對たいする美び醜しう關係けんけいは異い性せいより承うけるところの輕けい重ちゆうの度どが、比ひ較かくの取とれるものでないのだ。その階かい級きふの如いかん何なにに拘かはらず美び人じんに生うまれた女をんなは、ヤイ／＼と持も囉はされて何どこ處こへ往いつても大たい層そう歡くわん迎げいされ、少せう々くお馬ば鹿かさんでも面めんが上じやう々くとくると、いろんな者ものがウヨ／＼と寄よつて來きてワイ／＼天てん王わう、ヨツシヨイワツシヨイ／＼繪かづ

ぎあげつゝ寸すん隙げきでも見み出いだしたら最さい後ご一ひと太た刀たう切き込こまうと窺うかがふ物ぶつ騒さうさは實際じつさい油ゆ斷だんがならぬ。確たしかに美うつくしく生うれついた女をんなは幸かう福ふくである。全まく一しん身みんの幸かう福ふくであるべき筈はずだが、昔むかしから美び人じんと云いふと薄はく命めいと云いふ惡わるい相さう場ばを定さだめ、訝あかしな同どう情じやうを挾はさんだのはつまり最さい負ふの引ひき倒たふしに過すぎない。美び人じんが決けつして薄はく命めいと云いふのではなくツて、美び人じんそれ自じ身しんが終つひに薄はく命めいを招まねくやうな淺あさ慮しい舉き動どうに出でるのが多おほいからである。

往わう來らいを歩あるいてゐても美うつくしい女をんなに逢あふと決けつして惡あく感かん情じやうは起おこらない。ア、美うつくしい女をんなである、好いい女をんなである。と振ふり向むて見みる氣きになるものだ。夫それが獨ひとり男だん子しのみではない、女をんなが女をんなを却かへつ穴あなのあく程ほど能よく見みるものだ、見みらるゝ者ものは如どう何なにかといふと、何どん様なおはねさんでもシヤア突つ

でも、餘程の阿婆摺でない以上は、男にもあれ女にもあれチツト見られると人情上羞耻の心が兆して、之れを睨み返すだけの勇氣はないものであるが、自分は美人である、美人なるが故に有象無象が羨望してゐるのだ、自分の綺麗なのに恍惚たるのだと自惚心に、グツト反身になつてサア御覽よ、何うだい綺麗であらうと、天下の美人を一人で背負て立つやうな氣になり、羞耻心も失せて得々として見せびらかす氣にもなるのだ。

自分は美人であると云ふ觀念は、大抵の女にはあるものである。然ればとて『お前さんは美人だねえ、眞個に綺麗だよ』と云れたものは『嘘をおつきなさい』とか『御申戯ものですよ』とか、其の對

手の人柄に寄つた否定の應對をするが、美人と云れて怒るものは滅多にあるべきでない、そこが自惚と微毒氣であつて餘程特種の變つた處がないからは、自ら我が姿が醜いと自覺するものは稀れである是れと反對に人三化七と云ふやうな醜婦に向つて『お前さんは拙い面つきだねえ、化物からお釣が來さうだよ』と云つてみたら何うであらう、屹度其の女はブツと怒つて『へい、好うござんすよ、何うでお化でございますから……大きに憚りさま……』と南風を喰た煮コッリ程にブリ／＼するものである。自分だつてまさか美人でないことはよく自覺してゐるが、偏目は偏目なりに愛嬌があると誇り、鼻ツビイは轉んでも擦過傷をしないと得々するなど、勝手に理屈を

つけて自分を辯護して、何れかの長所を捉へて慰安の道を求めてゐるのである。跛でも顔立が十人並であらうものなら、チンガラコチンガラコの不様の歩き方などはてんで頭脳にはなく、どこまでも美人と思つてゐるなどは、罪のないもので女ほど自惚と自信の強いものはまづ無いのである。

顔の輪廓も姿も満足に發達して十人並に優れ、好い縹緞だとかお美しいとか他人から云れ、化粧鏡に向つて自分の顔に見惚る側になると、外出すると自然にデロ／＼衆目が集る、活動寫眞へ往かうが寄席へ往かうが、若い男の目は常に自分の周圍に視線を浴びせてゐる、斯うなるとサア直ぐ自惚といふ奴がコミ上げてきて、外を歩

るくもツン／＼と反身になつて肩で風を切る、其の癖若い生白い男と擦れ違ひでもすると、見ないやうな振してソツト偷み見る、若し先方の男が見返りでもすると、遽てツンと濟しこみ、何處までも美人の資格を崩すまい、輕騒だと云れまいと態と權威を保んとするのは随分と用意周到である。兎に角女で年頃であつて一寸と小綺麗だと、縁談口は彼方からも此方からも一時は降るほどあるもので、『先方は月給取ですが……お嬢さんをと大層御懇望で……』と申し込みである、親々も成るたけ娘には出世がさせたい、器量人の聲を取つて誇りたいから、腰辨などの小給者ではケンモホロ、でてんで對手にしない。是れは少々脈がもうなと思ふと、娘に相談を掛ける

のである。ところが其女がもし縹緞自慢であつたり、此方に財産が無くつても此の縹緞を賣り物にしたら、何様紳士豪商のところへでも輿入が出来る、屁ッポコ官吏や端た月給取の細君などゝなつて生涯を了るのは馬鹿だ、折角のこの縹緞が泣いて了ふなどゝ十二階の上止つた鳶ほどに、高いくを極めこんで頭を横に振つて納まりが附かない。偶には身分に過ぎた縁談が持ちこまれると、両親はこれだとホク／＼もので「おい、今度のはお前にも氣に入りさうな口だよ、先方は實業家で親御は銀行の頭取で、會社の重役も三ツ四ツ兼て評判の好方ださうな、其の息子さんと慶應出とかで……」と勧める、美人先生も少しは耳を傾ふける「そりや〇〇さんちやなくつ

て、多分さうでせう」お前何うして其様ことを知つてるのだい……左様だよ」それならダメよ、お家はあれ位のところなら往つても耻かしくありませんが、お聲さんと來たら丈の低い珍竹林で……慶應の理財科を稍とこスツト卒業した厄介息子さ」おやまあ、何うしてお前は其様に詳しく……」よく帝劇や、有樂座の音樂會へ來てる人よ、彼様人を夫に持つたら世間から馬鹿にされるやうで否やだわ」  
 「いくら男が小粒だつて……」左様いへば其様ものですが、それが岩崎とか三井とか云ふのなら我慢もする氣になりませうがね、〇〇さん位の財産ではねえ」と大氣焔である。  
 斯んな様な順序で何れも是れも急には纏まらない。終には呆れて

口を懸ける者もなくなる。年は決して逆行するものでないからズンズン進むし、良縁は求められないで自裂氣味と成つて来る、美人も斯うなると少々屁子垂の姿であるが、今更節を屈して辨當官吏の細君になるのも否やだと、空しく嫁入時を過ぎて了ひ、先きに口のあつたとき嫁いておけば、今ごろは令夫人で社會に立たれるものと後悔の臍を噬み、少し捨擦の自棄になつてくると人生の弱點男慾しさにつまらぬ者の手にかゝり、昨日の夢はうたかたの泡と消え、美貌はいつか縮緬皺に變つて歎息するより外は無くなつてくる。

否そうでなければ誘惑に逢つて墮落するか、幸運に意の如く自分の望みを達したところで、美貌が仇となつて、夫が愛の薄らいで來

ると此様家に居なくとも、米の飯と太陽は何處へでも附いて廻るものだ。妾のやうな美しい顔、意氣な姿を持つてゐたら、何様男でもコロリと成つて了ふものである。牛を馬に乗りかへて見替えてくれうとか、又姑にクヅク云れると、何だ貰ふ時はヤイク云て貴妾でなければ成らぬと云た口で、能くも妾に對して何のかのと叱言がましい事が言たものだ、飛んでもない杓子定規を振りまはして、我が田へ水を引いて追ン出る氣になつたり、或ひはまた惡魔の誘りに迷つて道を踏み外し、生涯を誤つうちに、昨日の紅顔は乍ら變じて今日は顔に波を寄せて来る、幾干美人でも年をとつたら哀れなもので、つまり自己の美に惚れた美人などは常にこんな考へをもつて

ゐる。それが美人氣質とでもいふのだらう。

### 寄宿舎の女學生

何れの女學校でも寄宿舎に起臥してゐる者、女學校生活などする學生は、まづ地方より笈を負ふて上京して居るのが最も多い。東京に住つてゐて寄宿舎に入つて修業するなどは、特種の學科を修める者の外は先づ少いのだ。

地方にゐて東京の女學校に入らうと志す女は、既に新しい女の卵で新聞や雜誌で、まだ見ぬ帝都の女學校生活に憧憬れ、いろくな空想を逞しくして、父母や兄さん姉さんが諫めたつて、中々に思

ひ止まる様な氣色なく『現代の女で、學校の一ツや二ツ卒業してゐないでは、未來が案じられますよ。ハイ今までの女子は夫に因て一身を犠牲にしてゐさへすれば、可もなく不可もなき生活は續けてゐられましたがね、生存競争が烈しく成つて來る、將來の活社會に小學校ぐらゐの義務教育に甘んじ、田舎のみに燻ぶつてるやうでは前途が思ひやられますわ。妾等を教養すべき責任者が、勤學の企望を挫折しやうとは、抑も間違ひの甚だしい譯ぢやありませんか。』と大した勢である。近頃の傾向ではあるがお嫁さんたるもの、條件に、高等女學校出身といふ一項目を加へてきた。クリ虫のやうな不器用な體格で、何とか云ふおデコを隠す結び方の束髪を若し禁じ



られたら、それこそ今戸焼の福助君を兄さんと呼ぶ様な女でも、花嫁御寮の花と飾ることが流行て来た。こんな風だから頑固一點張りの老爺でも、流石に子の愛には脆いもので、娘を出世させたいばかりの慈愛心から、さも税金でも拂ふ氣になつて女学校の門を潜らせ果ては寄宿舎へも入ることを濫々許すのである。

何れの學校でも取締は中々嚴重である。就中寄宿舎にある學生などに對しては、年頃の青春の血が漲つてゐる女を預るのだから、監督は十分に盡くされて居る。規則通りに行つたら家庭にゴロくして居るより遙か窮屈にも思へるが、殊に學校屋と稱される、學生を募集して月謝をセシメやうとする側では、名實相伴はない向が往々

ある。形式にのみ拘泥して内容の左ほどでない處へ、生じつか都會の風潮に染み、所謂女學生氣質なるものに誘られたら、折角志しを立て、遙々修業に來てゐる身で、トンダ修業に傾注し肝腎の學科はお留守になるものである。

『岸野さん、今日は何處へいらつしたの』保證人の家へ行つたのよ』『あら、貴嬢の保證人は向島にあるの……ホ、ホ、』『細野さんは人の悪いことよ、貴嬢はまア……何うして、往つていらつしたのねえ、例のところでせう……左様だわ、屹度左様ですわ、お樂み……』『あら、妾……彼の人では無くつてよ、花岡さんと御一緒でしたわねえ花岡さん』『今日はさうよ、岸野さんお樂みでしたのねえ、辛』

にあんな處を見せつけて、知らないと思つて口を拭いていらつしやるのはお人が悪くつてよ、今夜は何かお驕んなさい、驕らなけりア好つて、皆さんに吹聴するから……『貴嬢がたは悪い方ですことよ何にも男子と交際したつてさして罪悪ぢやありますまい、細谷さんだつて先週の日曜にはホラ例の未來の夫とさ……ホ、……、雜司ヶ谷を散歩して時間外に歸宿なさつたぢやありませんか、何も妾ばかり其那に責めなくも好くつて……』『そりや眞個なの岸野さん』『保險附きのよ、妾どんな證人にでもなるわ』『花岡さんだつて、そんな事を仰しやるなら素ッ破ぬきますよ』『妾になんか……大丈夫！』『あら白々しいことを言ていらつしやる 他人は知るまいと思つ

て……』『細谷さん、何……花岡さんのは……妾等はつかり、斯う云はせておいて、花岡さん一人好子になるは好くなくつてよ、言てお了ひなさいてえば……』『言て宜くつて……』『何をさ』『貴嬢のいつかの事よ』『何さ、いつかの事なんつて人聞きが悪いぢやありませんか監督の喧し屋でも聞いたら大騒ぎになつてよ』『それぢや秘密に教へて頂戴つてえば……』『花岡さんは早稲田の角帽よ』『おや否やだ、彼様ことを云ていらつしやるわ、冤罪よ、濡衣ですわ』『ダメですよ、チャンと知つてますからね、暑中休みにだつてお國へはお歸りにならないで、お二人で新家庭の豫習をしていらつしたのだから、夫れはお安くないのね』『最うお廢しなさい……ハイ、何とでも仰やい

ませ、お二人と一人ですから負け上げてあげますわ』さう、花岡さんが一番成功してゐるわね……細谷さんだつて好いわ』さうね、將來の大家だと此間の新聞にも批評が出て居たわよ』貴嬢もあれを御覽なすつたの……彼の方の書は全く崇遠なところがあるわ、細谷さんも彼の方の感化で、趣味を有つていらつしやるから、趣味が一致して嚙ぞ愉快だらうと想像されるわねえ』岸野さん、お驕りなさいてえば……貴嬢のは一番最近なもの、而もホヤ／＼ですからね』妾ばかりが驕つては割がわるいわ、ジャン拳で負けたものが驕るが公平だわ』岸野さんはズルイのねえ、ジャン拳賛成！』多勢決ですよ』酷いのねえ、又お二人で黨を組でよ』

寄宿舎で買食などは嚴禁してある。見附られたら監督からお目玉を喰ふのは知れてある。けれども或る場合には監督その人も學生から貰つて喰くついでる程だ。買物にも自分で出懸けることは出来な。い。必需品に托して小使に依頼するのである。彼れはまた心得たもので、無論足代はキット出る、買ったもの、内かゝ必ず分與さるゝものと承知して、大抵は快く一走り走つてくれるものであるから、窃り鉛パンや水菓子、驕りつこや、阿彌陀圖などをやつてバク附いて、意外もない理想の交換をしたり、自惚の共進會を開いたりして、之れを寄宿舎中に於ける唯一の娛樂として居る。

斯ういふ風の寄宿舎にあつて修學した女學生は、果して立派な良

妻賢母の資格を備へ得られるであらうか。甚だ覺束ないもので多くは脱線した女を出してゐる。全體現今の女、教育なるものは徒らに科目が多く、實習に於いては更に充實して居ないから、教育を受けた女は口先ばかりは馬鹿に達者である。大抵なものは言負されてあつた開た口も塞がらない。婦人の道徳も説き、人道の腐敗も叱咤する、日用のお料理も御存じであるらしい。自由とか開放とか主義主張を舌の動くまゝに喋舌つても、更にそれを實際に取つて用ふることは難い。却てその言ふことゝ行ふことゝは正反對である。教育を受けた女は、良人の柔順でなく亭主を尻に敷きたがる。貞操は口に云ふもので行ふものでないと合點し、舅姑は一も二もなく頑冥不

靈にして談ずるに足らずとし、斯かるものに孝養を盡くするとは大正式の細君が探るべき道ではない、ドン／＼遣込めて壓迫して了へばよいと叫び、御飯を焚かすればお粥やらツマ米飯やらを炊き、お料理と來たらブックと首引きで材料の撰擇のみに喧しく、庖丁加減はお饗どんに劣ること數等である。是れが女學校出の才媛氣質といふのであらう。

是れが新しい家庭を築きあげて、所謂理想なるものを實現されて行くのであるから、假令新しい女であると標榜しないまでが、學生氣質の失せないダラシのない家庭を造り、日本はまだ生活程度が低いも聞いて呆れる次第である。